ごあいさつ

板橋区は、昭和６０年１月１日に世界の恒久平和を願い、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶を全世界に訴える「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

「中学生平和の旅」は、『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』ことを目的に実施しており、今年度も被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各２２名、計４４名を派遣しました。この感想文集は、平和の旅を通して学んだ貴重な経験と、現地で感じたそれぞれの「平和への想い」を自分自身の言葉で綴ったものです。

戦後７４年が経過した現在、世界にはいまだ多くの核兵器が存在し、新たな兵器の開発も進められています。また、地域紛争やテロ行為などにより、多くの尊い命が奪われています。戦争による悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけにしていただければ幸いです。

板橋区は、国際社会の一員として全ての国が取り組むべき普遍的な目標である SDGs（持続可能な開発目標）の理念を見据えつつ、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

令和元年１１月

板橋区長

坂本　健

目　次

ごあいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第１部　中学生広島平和の旅
　１．行程表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
　２．団長感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　３．参加中学生感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

第２部　中学生長崎平和の旅
　１．行程表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　２．団長感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　３．参加中学生感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

第３部　資料編
　１．広島
　（１）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第・・・・57
　（２）平和宣言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　（３）平和への誓い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
　２．長崎
　（１）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第・・・・・・・・63
　（２）長崎平和宣言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
　（３）平和への誓い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

しのだ　つよし	議員	寺田　ひろし	議員
小野田　みか	議員	山内　えり	議員
高山　しんご	議員	山田　ひでき	議員

■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

間中　りんぺい	議員	さかまき　常行	議員
内田　けんいちろう	議員	石川　すみえ	議員
いしだ　圭一郎	議員	中妻　じょうた	議員

第１部
第２５回　中学生広島平和の旅

原爆ドーム前にて

参加生徒

板橋第一中学校	大津留愛麻	志村第四中学校	仲　美妃	桜川中学校	島村南々子
板橋第二中学校	吉村　琉那	志村第五中学校	秋山　詩乃	赤塚第一中学校	梁　雅琪
板橋第三中学校	稲場小音羽	西台中学校	安藤　圭人	赤塚第二中学校	中山　優羽
板橋第五中学校	村山　奈菜	中台中学校	谷田部透麻	赤塚第三中学校	佐々木いぶき
加賀中学校	檜垣　美希	上板橋第一中学校	辰市　朔	高島第一中学校	舟山　由奈
志村第一中学校	柿﨑　琉花	上板橋第二中学校	田中　大介	高島第二中学校	水野いおり
志村第二中学校	鶴巻　璃子	上板橋第三中学校	宮城　優奈	高島第三中学校	眞壁　愛莉
志村第三中学校	伊菅　凛人				

引率者

板橋第三中学校　武田　幸雄校長（団長）　大島　泰子教諭（指導員）　大西　健太教諭（指導員）

中学生広島平和の旅　行程表

実施期間　令和元年８月５日～７日（２泊３日）

８月５日（月）

時　間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:20	板橋区役所　発
8:00	東京駅　着
8:30	東京駅　発
12:30	広島駅　着
12:40	広島駅　発（市電）
13:00	広島市役所　着
13:10	★ヒロシマ青少年平和の集い受付
13:30～17:00	★開会式（開会挨拶、参加自治体紹介） ★平和学習会（被爆体験講話、ワークショップ、発表） ★閉会式（講評）
17:30	ホテル　着
19:00	夕食
22:00	就寝

８月６日（火）

時　間	行動内容
5:00	起床
6:00	朝食
7:00	ホテル　発（徒歩）
7:10	平和記念公園　着
8:00～8:50	平和式典参列
9:30～14:00	観光・昼食
15:00	ホテル　着
15:30～17:30	学習会
18:00	灯篭流し体験
19:00	夕食
19:50	灯篭流し見学
22:00	就寝

８月７日（水）

時　間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発（観光バス）
8:30	平和記念公園　着（公園内見学、献花、折鶴奉納）
9:30～11:00	平和記念資料館等見学
11:30	平和記念公園　発（観光バス）
11:50	広島駅　着
12:40	広島駅　発
16:30	東京駅　着
17:30	板橋区役所着・解散式

★はヒロシマ青少年平和の集い事業（広島市主催）

私たちにできること

第 25 回中学生広島平和の旅
団長　　武　田　　幸　雄
（ 板橋第三中学校長 ）

【国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。みんなの『大切』を守りたい。】

【『ありがとう』や『ごめんね』の言葉で認め合い、許しあうこと。寄り添い、助け合うこと。相手を知り、違いを理解しようと努力すること。自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。】

以上は、今年の広島平和記念式典（８月６日）で地元小学校の代表児童が述べた「平和への誓い」の一節です。今年の記念式典は、通過中の台風の影響で、時折激しく吹き付ける雨風の下で執り行われました。地元バスガイドの方によると、雨の中の式典というのは過去 70 回を超える式典の中でも「３回あったかどうか」とのことでした。そうした中、被爆後 74 年が過ぎ、令和の時代を担う小学生が心を込めて述べた「平和への誓い」の一節は、テントを打つ強い雨音以上に聴く者の心に響きました。

２泊３日の平和の旅（別添行程表を参照）から帰京した板橋区代表生徒 22 名は、先の一節を借りるなら「私たち子ども（中学生）にもできること」を考えました。そして、その一つに「広島で見たこと、聴いたこと、感じたことを、一人でも多くの人に伝えること」があるという結論に至りました。それを受けて、ここに掲載されている感想文を作成したり、11 月１日の「板橋平和のつどい」での発表や各学校・地域等での報告会に向け、全体での事後学習や個別の学習活動に取り組んだりしているところです。

団長として引率させていただいた私も、自校（板橋第三中学校）の生徒たちに、自分の体験をどのように還元しようかと考えました。そして、２学期の始業式に「戦争の愚かさ・平和の尊さ」を主題とした全校道徳の時間を設けました。手前味噌かもしれませんが、その授業では多くの生徒が深く考え、熱く議論していました。そんな姿を見て、先人たちの失敗・歴史の過ちを、若い世代に語り継ぐ大切さを再認識した次第です。

右の写真は、平和記念公園に設置されている原爆死没者慰霊碑です。碑文は【安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから】と刻まれています。

先人たちの払った莫大な犠牲を無駄にしないため、そして、後人たちが同じ失敗を繰り返さないために、現在を生きる私たちにできること、やらなければならないことを、これからも生徒たちと一緒に考え続けていきたいと思っています。

～広島平和の旅～

板橋第一中学校　２年　大津留　愛麻

１日目は、『ヒロシマ青少年平和の集い』に参加しました。ここでは、被爆者の山本定男さんにお話を伺いました。

山本さんは、当時 14 歳で草取り作業のため集合をしていた時に爆心地から約２ｋｍのところで被爆しましたが、幸い軽傷で済んだそうです。山本さんが、「核兵器を持たない平和な世界になってほしい。」と仰っていたのが、とても印象的でした。各地域からの参加生徒とのディスカッションでは、原爆の記憶を風化させないためには何ができるかを話し合いました。

２日目は、『平和記念式典』に参加しました。

式典では、犠牲者のご遺族や被爆者の方の話を伺い、原爆（リトルボーイ）が投下された 8 時 15 分に、亡くなった方々に 1 分間の黙祷を捧げました。その時私は、令和の時代も戦争がない平和な時代が続くようにと思いを込めました。

その後、宮島へ行き厳島神社を見学し、夜には灯篭流し体験をしました。川の上を流れる沢山の灯篭はとても綺麗で、こんなに多くの方々が平和の祈りを込めているのだと感じました。

3 日目は、みんなで平和記念公園の原爆の子の像で折り鶴奉納をし、原爆死没者慰霊碑に献花した後、平和記念資料館の見学に行きました。資料館には、被爆する前の広島の街並みや、やけどを負った人の写真、被爆者の遺品、被爆者の描いた絵などの貴重な資料がありました。これらを見たとき、本当にこんなことが同じ日本で起こったとは考えられませんでした。戦争は、一瞬にして尊い命を奪ってしまうということを実感させられました。

最後にこの広島平和の旅を通して分かったことは、今もまだ世界には戦争があり、核兵器もあって、それをすぐに使うことができてしまう現実があるということです。

こんなに悲惨な戦争を二度と起こさないために、この戦争や原爆の恐ろしさを風化させることの無いよう私たちなどのこれからの世代の人たちにこのことを伝えるとともに、このような平和に関する行事に積極的に参加し、平和の尊さを受け継いでいくべきだと思いました。

平和への願い

板橋第二中学校　　２年　吉村　琉那

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。いつもと変わらない日。広島に一発の原子爆弾が投下されました。平穏な日々が続いていた広島が、一瞬のうちに地獄のような日に変わったのです。

〈青少年平和の集い〉

15 団体の中高生が集まり、「原爆の記憶を風化させない為には」というテーマで話し合いをしました。ここでは、被爆体験者の山本さんのお話を伺って、改めて戦争の恐ろしさを感じました。質疑応答の中で「アメリカを許せないですか？」という質問に山本さんは、「当然許せない。でも、当時の日本の軍が戦争をしていた事も許せない」とおっしゃいました。私は、その言葉がとても心に残っています。

〈平和記念式典〉

原爆で亡くなった方々を慰霊する為に、多くの人が集まりました。小学 6 年生の平和への誓いの中で、「戦争は忘れることのできない特別なもの」「悲惨な過去を悲惨な過去のままで終わらせない」という言葉がありました。私はその言葉を聞いて、平和へ繋がる願いが込められた大切な言葉だと思いました。

〈平和記念資料館〉

資料館では、ボロボロになった服、体中血だらけで助けを求める人々や後に発症した後遺症で亡くなった方々の写真や、生きたくても生きられなかった方々の魂の叫びが伝わってくる目をふさぎたくなるような物が数多く展示されていました。原爆がどれだけ悲惨でとても酷いものであることを学びました。

〈3 日間を通して〉

今まで戦争についてあまり知らなかった私は、今回の広島平和の旅を通して、過去の事と捉えず、未来にもつなげていきたいと思いました。今年で終戦から 74 年もの月日が経ちました。数少ない被爆体験者の高齢化の進む状況で、今の私達は何ができるでしょうか。それは、広島を深く知り、「戦争」に対する意識を高め、この世界に「戦争」という言葉のない平和な日々を創っていくことです。そして、一人でも多くの人に知ってもらえるよう、伝えていくことが大切だと思いました。この学びと経験を活かし、平和への第一歩を進めていきたいです。

私が伝えたいこと

板橋第三中学校　２年　稲場　小音羽

私は戦争や原爆の怖さ、辛さ、苦しさについて、授業などで勉強し、その時は「怖い」「かわいそう」などと感じてはいましたが、実際に広島に行ってみると、自分の想像をはるかに超えることが実際に起こっていたということを実感し、息苦しさを感じるほどの衝撃を受けました。

平和記念資料館

平和記念資料館には、原爆投下時やその後の状況がわかる写真や絵、遺品などが展示されていました。

びりびりに破けた服、ぼろぼろの水筒などを見て、思わず涙がうかんできました。
中学生の子が、楽しみにしていた母の作ったお弁当を抱きしめながら亡くなったという話には胸が締め付けられました。実際の遺品は、中に何が入っていたものかわからないほど真っ黒になっていました。

痛々しい写真もたくさん展示されていました。
その中には、全身に火傷を負った人、たくさんの人でうめつくされた病院、さらには、原爆投下の衝撃、強い熱線の影響で顔に靴下が張り付いて取ることのできない少女の写真などが何枚も並んでいて、受け止めきれないほどの現実に、胸が痛くなり驚きを隠せませんでした。

水を求めて血だらけの人が川に飛び込んでいる様子。自分の目が垂れ落ちていくのを手で受け止めている兵隊さん。青、赤，紫と肌の色が変色し、鬼のように膨れ上がった死体などをリアルに絵で表現され、目を覆いたくなるものばかりで、他人事と思っていたのに、いっきに身近な恐怖につつまれました。

世界で唯一の被爆国となり、その悲惨さを体験した日本は、憲法で二度と戦争はしないということを定めたにもかかわらず、今、日本の政府がその憲法を改正しようとしていることを知りました。私は戦争が再び起こるのだけは絶対に嫌だと思いました。

広島平和の旅に参加させてもらって、感じたことをなるべく多くの人に伝え、戦争は絶対してはいけないということを多くの人に再認識してもらい、日本がそして世界が平和であるよう、声を挙げていくことが大事だと強く感じました。

広島平和の旅に参加して

板橋第五中学校　２年　村山　奈菜

家族とご飯を食べ、友達と遊ぶ。そんな平凡な毎日がある。それだけでも幸せな事だ。

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、悲劇は起こった。広島に原子爆弾が投下されたのだ。これにより多くの命が奪われた。その後、たくさんの人たちの協力により復興が進められ、今に至るのだ。

1 日目。私たちは「**ヒロシマ青少年平和の集い**」に参加した。そこでは各県の人達が集まり講話を聴いたり、話し合ったりした。話の中で学べたことはたくさんあった。

私は放射線が 2 種類あったということが印象に残った。1 つは**初期放射線**。これは 1 分以内に放射され、数日後、被爆者はほとんど死亡してしまった。もう 1 つは**残留放射線**。これは初期放射線で出来た土や建物などの破片が**黒い雨**となって降る「放射性降下物」。**残留放射線**は数日で消える。

原子爆弾、リトルボーイが広島に落とされた理由は、「人口が集まっている」、「広島は東京と違って大きな空襲を受けていなかった」など様々な条件が重なったからだった。
このように原子爆弾の事だけでなく落とされた理由など細かいことまで知ることが出来た。
その後「原爆の記憶を風化させないためには」というテーマで話し合いが行われたが、「たくさんの人に知ってもらうために現代ならではの方法で伝える」「義務教育の中で授業をしてみる」などの意見が出された。

2 日目。私たちは「平和記念式典」に参加した。朝、8 時 15 分に「**平和の鐘**」が鳴らされ、参列者全員で 1 分間の黙とうを行った。夜には「**灯篭流し**」を体験した。この灯篭流しは、平和への願いなどを込めて川に流すもので、海外の方も多くいた。「戦争や紛争などがこの世の中から消え去りますように」などの願いを書いていた。

3 日目。最終日、私たちは**平和記念資料館**を見学した。そこには、生々しい写真や絵、実物の洋服まで置いてあった。私が印象に残っているのは、階段に残された**黒い人影**だ。もちろん影ではなく、原子爆弾の爆発により蒸発してしまった人間の跡だ。写真で見るより薄くはあったが、確実に残っていた。この跡は、原爆の影響による熱は人間の体までもを溶かしてしまう、という恐ろしいことを示している。

私は「中学生広島平和の旅」に参加してたくさんの事を学ぶことができた。原爆の投下を広島と長崎で最後にするため、核兵器をなくし、国や地域を超えてお互いに仲良くすることが大切だと思った。さらに、平和な未来を作るため、みんなでどうしたら平和になるのかを考え、それを実現することが大切だと思った。

私達が忘れてはいけないこと

加賀中学校　２年　檜垣　美希

1945 年 8 月 6 日月曜日午前 8 時 15 分。広島に一発の原子爆弾が投下され、罪のない多くの人々の命を奪いました。たった一発の原子爆弾で変わってしまった日常。広島の人々はどのような気持ちになり、生活は一体どれだけ変化してしまったのでしょうか。

【一日目　平和学習会】

被爆体験講話で、14 歳の時に爆心地から約 2 ㎞離れた東練兵場で被爆した山本さんの話を伺いました。たまたま学校ではなく、東練兵場に集合だったため、命が助かったそうです。山本さんが当時通っていた中学校は、爆心地からわずか 600mほどだったため、学校にいた中学 1 年生の生徒は、全員命を落としたそうです。最後に、山本さんは「アメリカを許すことは出来ないが、負けているのに戦争を続けた当時の日本にも非があり、許せない」とおっしゃっていました。私はこの話を伺って、山本さんはとても辛かったと思い、そしてこの様に話してくれてありがたいとも思いました。

【二日目　平和記念式典】

式典のなかで印象に残ったのは、小学 6 年生のこども代表による平和への誓いです。その誓いのなかに「国や文化や歴史、違いは沢山あるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じ」というものがあり、その言葉に私はとても共感しました。

広島には「平和の歌」があります。私は、式典に参列するまで知らなかったので、聴いたときは鳥肌がたち、たくさんの人の思いが詰まっていると思い、とても感動しました。この歌を、ここだけにとどめるのではなく、もっと多くの人に聴いてほしいと思いました。

【三日目　平和記念資料館】

資料館には、沢山の写真や遺物がありましたが、どれも残酷でとても直視できるものではありませんでした。写真を見ていると、子供から大人までみんな深いやけどを負い、とても苦しそうでした。資料館でみた数々の写真が忘れるなとでも言うように未だに脳裏にこびりついています。

【最後に】

この 3 日間で改めて戦争について考え、そしてこの平和の旅で学び、体験したことを忘れてはいけないと強く思いました。この旅で私は、大きく成長できたと思います。この先、核兵器廃絶などの平和へと繋がる活動に、積極的に携わっていければと思います。

平和記念資料館に行って

志村第一中学校　２年　柿崎　琉花

広島平和の旅 3 日目。私は平和記念資料館に行きました。事前に、かなり衝撃を受けるような写真や遺品があると聞いて覚悟していたのですが、実際に行ってみると、そんな覚悟も消し去ってしまうほどのショックを受け、原爆の激しさや恐ろしさを実感させられました。

最初に印象に残ったのは、原爆の瞬間を再現した映像でした。空から原子爆弾が落ちてくるところから始まり、地面に付いたと思ったとき、画面が真っ白になりました。眩しい状態が何秒か続き、収まったと思ったときには、もう元の広島はありませんでした。画面全体に真っ赤な火の海が広がり、建物は原型をなくしていました。私は、あまりにリアルなその映像に、思わず見入ってしまいました。そして同時に、この旅や資料館にどれほどの意味があるのかも実感しました。

映像のほかに、たくさんの写真や遺品がありました。大けがを負った大人、川に飛び込む人々、必死になって親を探す子供たち。そんな人の写真や絵が大量にあって、私は泣きたい気持ちでいっぱいになりました。どうしてこれほどまでに無差別なのか。市民はただ日常を過ごして生きていただけではないか。そんなことを思いながら顔に大やけどを負った子供の写真を見たときには、「そんな目でこっちをみないで」と思ってしまいました。それほど切なく、胸が締め付けられるような写真でした。

遺品の中には中学生の服もあったのですが、サイズがとても小さくて当時の子供の体型がどのようなものだったのかが分かりました。服やカバンの他にも陶器、金庫、建物の一部などがありましたが、変色して汚れていたり、原型をとどめていなかったりしていて本当に見るのが怖くてつらかったのを覚えています。

私は、平和記念資料館に行って、改めて平和であることの幸せや、これから自分たちがするべきことについて考えました。私は当時の人々を助けることはできないし、今中学生の自分に世界を動かすような力がないことも分かっています。けれど、私は戦争の悲惨さ、原爆の被害の大きさを学びました。私には、この旅で得たものを伝えることができます。原爆は、ほんの 74 年前にこの日本で起きたこと。絶対に他人事にしてはいけません。これからどんどん時がたって、いつか戦争があったことすら忘れられてしまう…。そんなことがあってはいけないのです。原爆の出来事を風化させないためには、私たちがこの旅で見てきて感じたことを伝えていくべきだと思っています。どうか今の小学生や、これから生まれる新たな命のためにも、「昔あったこと」で終わらせないでください。今が平和ならいいと考えないでください。今の世界は平和ではありません。むしろ、これから私たちが平和にしていかねばならない世界なのだと私は思っています。

戦争を忘れない

志村第二中学校　２年　鶴巻　璃子

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、一瞬にして多くの尊い命が奪われてしまいました。戦後から 74 年経った今も、原爆による被害に苦しんでいる方がたくさんいます。このような戦争を絶対に忘れてはいけません。そのために今を生きる私たちには、どのようなことができるのでしょうか。

＜ヒロシマ青少年平和の集い＞

1 日目は、広島市役所で「原爆の記憶を風化させないためには」というテーマで、グループディスカッションを行いました。私たちのグループでは、記憶を風化させないためにはもっと若い世代の人に戦争について考えてほしいという意見が出ました。そのために、SNS を使い、発信するという提案や、誰でも見やすいドラマやアニメーションにするというアイディアが出ました。こういったものを学校の授業で見せていけば、若い世代の人たちも、戦争についてもっと考えてくれるのではないでしょうか。

唯一の被爆国として、国民全員が戦争と平和についての意識をより高めていく必要があると強く感じました。

＜平和記念式典に参加して＞

平和記念式典にはたくさんの遺族の方が参列されていました。参列者の中には外国の方もたくさん来ていて、戦争と平和について考えているのだと感じました。

安倍内閣総理大臣と広島市長の平和宣言に“核廃絶”という言葉が多く使われていました。日本が最後の被爆国になるように、また、核保有国がゼロになるように、私も願ってやみません。

＜原爆の子の像＞

私はこの 3 日間の「平和の旅」で戦争は人の考えをも狂わせてしまう恐ろしいものだということを、そしてこの戦争を絶対に忘れてはならないということを改めて実感しました。新しい時代を生きる私たちは戦争や原爆のことを後世に伝えていくという大きな使命が託されています。

核保有国がゼロになるには、この先何十年とかかってしまうかもしれませんが、少しずつでも核なき平和な世界になっていってほしいと思います。

ヒロシマを伝える

志村第三中学校　２年　伊菅　凛人

今、日本では平和が当たり前になっています。それはとても良いことだと思いますが、戦争の悲惨さや広島で原子爆弾が落とされたという恐ろしい歴史を知らないままでは、よくないと思います。平和を守り続けるために、戦争、原爆について知ることが必要だと思います。

＜ヒロシマ青少年平和の集い＞

「ヒロシマ青少年平和の集い」では、被爆者の山本定男さんからお話を伺いました。山本さんは、爆心地から 2.5ｋｍ離れた東練兵所で被爆しました。山本さんは、核兵器を無くしたいと語っていました。また、「アメリカに原爆を落としたことは憎んでいるが、日本が戦争をしていたことが許せない。」と話していました。この話から、原爆そのものより原爆の悲劇を引き起こしてしまった戦争が恐ろしいと感じました。そして二度とそんなことは起こしてはいけないと思いました。

＜平和記念式典＞

正式名称は「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」です。今年は原爆投下から 74 年、「広島平和記念都市建設法」の公布・施行から 70 年目を迎えています。平和記念式典に参加して、僕たちが戦争の悲惨さを知って伝えていかなければならないということを感じました。なぜなら、被爆者の方々の高齢化が進み、戦争の恐ろしさを伝えられる人が少なくなってきているからです。そして、こども代表の平和の誓いを聞いたときに子供でもこの思いを人に伝えることができると気づいたからです。

＜平和記念資料館＞

3 日目に平和記念資料館を見学しました。4 月 25 日にリニューアルしたばかりで館内はとてもきれいで見学しやすかったです。しかし、展示されていたものは、見ていてつらくなるものばかりでした。僕と同年代で亡くなった人も多いことを知り、それを考えるととても悲しかったです。一番僕が衝撃を受けたものは原爆で亡くなってしまった方々の遺品です。遺品には、原爆の被害、恐ろしさを伝える力があります。それは、遺品そのものの状態だけではなく、背景や思いがあるからです。僕は原爆の非人道性を感じました。

＜感想＞

戦争をしてはいけないと知っていました。しかし、この 3 日間で、なぜ戦争をしてはいけないのかを詳しく知ることができたと思います。

僕は、もう二度と戦争、原爆を繰り返さないためには、そのことについて知ることが一番だと思います。だから、代表として学んできた僕たちが、1945 年 8 月 6 日に広島で起きたことや戦争のことを伝えていきたいと思います。この経験を活かし、この世界が平和に暮らせるよう、少しでも貢献できるように行動していきたいと思います。

広島から学ぶ

志村第四中学校　２年　仲　美妃

私は、今回の広島平和の旅に参加し、戦争の悲惨さについて学びました。そして、戦争や原爆の悲惨さを後世に伝えていき、戦争のない平和な世界になってほしいと思いました。

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。
広島に投下された 1 発の原子爆弾（リトル・ボーイ）は、広島の人々の日常を一瞬にして奪いました。その時のことを、体験講話という形で、被爆者の山本定男さんからお話を伺いました。山本さんは、14 歳の時、爆心地から 2 ㎞離れた東練兵場で被爆されました。被爆された時のことから、その後の放射線被害のことまで、とても詳しく教えてくださいました。原爆により、全身に大火傷を負った人。皮膚や肉が剥がれてしまった人。水を求めて川に飛び込む人。想像もできないようなお話を伺い、気付くと私は、メモを取る手が止まり、話に聴き入っていました。
私は、今ある日常がいかに幸せで尊いのかを改めて実感しました。
「放射線による障害で、被爆をした人は今も苦しんでいる。原爆は人を苦しめる。そのことを、世界の人へ伝えてほしい。」とおっしゃっていた山本さんの想いを伺って、原爆の恐ろしさを感じるとともに、被爆者の方の想いを受け継ぎ、同じような過ちを繰り返すことがないように、後世へと語り継いでいかなければならないと強く思いました。

初めて訪れた広島は、とてもきれいでにぎやかでした。その中に、まるで時が止まっているかのように、原爆ドームがありました。テレビや写真では見たことがあったのですが、直接見るのは初めてだったので、近くで見たときは、あまりの衝撃に言葉が出ませんでした。ドーム部分は鉄骨だけになり、周りにはがれきが散らばっていました。美しい広島の街の中に、当時の姿を残す原爆ドームは、とても迫力があり、原爆の恐ろしさを物語っていました。

この旅で学んだことや感じたことは、書ききれないほどにたくさんあります。3 日間、とても貴重な体験をさせていただきました。被爆者の方からお話を伺うことができるのは、私たちの世代が最後になるかもしれません。だからこそ、今回、自分の耳で聞いたことを、戦争を知らない世代へと語り継ぎ、もう二度とこのような悲惨なことが起こらないよう、微力ながらも努力していきたいと思います。
世界から核兵器が無くなり、笑顔の絶えない、平和な世の中となるように。そして、第三の被爆地をつくらないために、平和の旅で学んできたことを、一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

ヒロシマを伝える

志村第五中学校　２年　秋山　詩乃

戦争から 74 年が経過し、その体験を語ることができる人が減った現在、原爆について自分の目や耳で感じたいと思い、今回の旅に参加しました。

【ヒロシマ青少年平和の集い】
全国各地から集まった学生と、原爆について学び、平和について考えました。原爆によって失った多くの命や苦しみながら亡くなっていった人。死からは逃れたが大切な人を失い、今も心身に傷が残る人。たくさんの人が原爆によって苦しめられたのだと知り、このような核兵器がまだ世界にあることの恐ろしさを感じました。
また被爆した方のお話の中で、「アメリカに対してどう思っていますか。」という質問に、「アメリカを許すことは出来ないが、**日本が戦争をし続けたことの方が許せない。**」という答えが返ってきました。この言葉から私は、「戦争をしない」という強い意志を持ち続けることが大切だと強く思いました。

【平和記念式典】
式典には、90 以上の国の人々が参列していました。平和への誓いの中で、「違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。」という言葉が印象に残っています。大切なものが失われたあの日と同じことを二度と起こしてはいけないと思うと同時に、違いを理解し助け合うことの大切さを感じました。

【最後に】
私はこの三日間で、言葉に表すことが出来ないほどの戦争の恐ろしさと平和の尊さを学びました。核は世界に必要のないものであり、あってはならないものだとヒロシマが今も訴え続けています。その思いを世界に発信していきたいと私は思います。
原爆資料館では、写真から目を逸らしてしまいたくなるくらい悲惨なものがたくさんありました。これが日本で起こったことだとは受け止めがたい程の衝撃を受けました。しかし、目を逸らさず自分の目で見て感じることで、原爆の恐ろしさを知ってほしいと思います。そのために原爆ドームや資料館などたくさんのものを後世に遺していきたいです。
私は、戦争のない世の中を作るために 74 年前のヒロシマの思いを「伝える人」として生きていきたいです。
最後に、今回の旅に関わった先生方、区の職員の方、ありがとうございました。

永遠平和のために

西台中学校　２年　安藤　圭人

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、雲一つない快晴だった広島が一発の原子爆弾により廃虚と化し、多くの生命が奪われました。

今回、広島平和の旅に参加して、戦争に対する被爆者の強い思いや、平和の尊さについて学びました。

私が一番印象に残っているのは、1 日目の被爆体験講話です。
山本定男さんは、戦争について重々しい表情で辛い記憶を語ってくれました。
山本さんは 14 歳の時、爆心地から約 2 キロ離れた東練兵場で、畑の草取り作業の集合時に被爆しました。一緒にいた 200 人余りは吹き飛ばされ、山本さんは顔の左半分ほどをやけどしたそうです。広島駅の方向に巨大な火炎が立ち上り、何が起こった分からない恐怖のあまり、同級生と共に近くの山を目指したそうです。奇跡的にも一家全員無事で放射線による原爆症も発症しなかったそうです。

一方、この日が建物疎開作業の日だった 1 年生 321 人と引率の先生 4 人は、爆心地から約 500 メートルの土手で何が起こったか分からないまま、その場で全員即死したのだと思い、胸を痛めていたそうです。
ところが、1969 年、広島第二中学校 1 年生の被爆状況を追った民間放送テレビ番組［碑］で 1 年生の本当の最期を知ることとなり大きな衝撃を受けたそうです。山本さんは、「悲劇が二度と繰り返されないよう、核廃絶を達成しなければならない。そのための声を絶やしてはいけない」と強く訴えていました。

私は、山本さんが話されたように、世界で唯一の被爆国民である私たちが、核兵器の非人道性、平和の尊さ、今でも世界には戦争や地域紛争で尊い命が失われている事実を世界に発信する伝承者となり、戦争の記憶を風化させないことを誓います。毎日何不自由なく生活できることは幸福であり、感謝しなければなりません。これからも、世界平和のために貢献していき、いかに力の行使が無意味であるかを訴え続けます。世の中には生きたくても生きられなかった人達がいることを理解し、限りある生命を大切にしていきます。

次の世代へ

中台中学校　２年　谷田部　透麻

私は、3 日間の広島平和の旅で様々な行事に参加し、戦争についてこれまで知り得なかったことを多く学ぶことができました。

ヒロシマ青少年平和の集い

ここでは全国から集まった人達と原爆について学びました。被爆体験証言では被爆者の山本定男さんにお話をしていただきました。山本さんは当時中学 2 年生で、8 月 6 日は学校に行く予定でしたが急遽、東練兵所の畑の草取り作業に代わり、そこは爆心地から 2 ㎞ほど離れていたため命拾いしたそうです。一方、中学 1 年生は広島市街で建物疎開の作業をしていたため、全員死亡したそうです。奇跡的に、山本さんの家族は全員無事でした。「アメリカを憎んでいるか」という質問では、「許すことはできない。でも日本が戦争をしたことのほうが許すことはできない」とおっしゃっていました。全国から集まった人達とのグループディスカッションでは『原爆の記憶を風化させないためには』というテーマで話し合いました。その中で、若い人に伝えるためにＳＮＳを活用するという意見が多く出ました。私もそのように、「原爆の記憶」を伝えることができればいいと思います。

平和記念式典

式典には安倍内閣総理大臣や海外からの方をはじめ、多くの子供も参列していました。現在までに、分かっている死没者は 31 万 9,186 人です。戦後 74 年経ちましたが、現在も原爆症で苦しんでいる方達がいることに、原爆の恐ろしさを改めて痛感しました。

平和記念資料館

資料館の展示品の中には、目を背けたくなるようなものもたくさんありました。私が一番印象に残っているのは、真っ黒になった男の子のお弁当です。原爆投下の 1 日前、8 月 5 日は配給日で、翌日に学校へ持って行くお弁当に米、麦、大豆を混ぜたごはんを喜んで持って行きましたが、それを食べることなく亡くなったというものです。しかも男の子は、そのお弁当を抱きかかえるように亡くなったそうです。男の子は、お弁当をどれだけ楽しみに大事に思っていたのかと思うと、胸が痛くなります。戦争の悲惨な記憶を忘れないためにも、実際に起きた現実の出来事を、後の世代の人々に残すことが大切だと思います。

最後に

私は、今回の広島平和の旅で現地に行かなければ分からない体験をさせて頂きました。その中で聞いたことや体感したことを多くの人たちに伝えたいです。それも戦争をよく知らない私たちのような世代にこそ伝えるべきだと思います。戦争のない時代として終わった平成。新しい元号である令和の時代もそれ以降もずっと戦争のない時代が続くためには、これから社会を担っていく私たちにも大きな責任があると思いました。

平和を考える

上板橋第一中学校　２年　辰市　朔

『被爆者体験講話を聞いて』

広島に原爆が投下されてから 74 年が経過した、令和元年の 8 月 6 日、僕は広島にいた。その日から僕は広島、原爆について多くのことを考えるようになった。

「空襲はいつも夜中に来るから、朝に来たときは偵察だと思い込み、皆でぽかんと空を見上げていた。」

当時僕と同じ年齢だった被爆者の山本さんが言っていた言葉だ。その言葉を聞き、僕は何気ない日常が一瞬のうちに変わってしまった当時の様子を想像することが出来た。1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、その時原爆は多くの命を奪い、人々の感情さえも奪った。そして同時に、未だ癒えることのない恐怖と深い悲しみを残していった。

『平和記念資料館を見学して』

目を背けたくなるような写真が多く、心が苦しくなった。テレビでも見たことのあった遺品のベルトやズボン等を見て、本当にここで戦争があったことを実感して、何気なく過ごしていた当たり前の日常が、非常に有難くて幸せなことだと知った。

中学生の皆で折った鶴は平和を願う一部になれた。たくさんの人達の手で作られた折り鶴や献花は、これからの平和を願う人々の思いが込められた美しいものだった。

『原爆ドームを見て』

周囲にある現代のビルと比べて、74 年前の形をした原爆ドームは、まるでそれだけがタイムスリップをしたかのような違和感があった。

瓦礫の落ちたその建物は、当時の出来事の恐ろしさを物語っていて、堂々としているように思えた。力強い【ヒロシマ】の象徴のようだった。

『感想』

僕は「広島平和の旅」に参加して、戦争の悲惨さと平和の有難さを実感した。この平和の旅で学んだことを活かして、戦争の愚かさ、悲惨さを世界中のたくさんの人に伝えていきたい。

最後に、このような大変貴重な経験をさせてくださった多くの方々、本当にありがとうございました。

広島の思い、世界の思い

上板橋第二中学校　２年　田中　大介

今から 74 年前の 8 月 6 日、広島に一発の原子爆弾が投下されました。それまでの広島の活気は一瞬で消え、廃墟と化しました。

【ヒロシマ青少年平和の集い】

日本全国から来た小中高生でグループを作り、『戦争の記憶を風化させないためには』について話し合いました。

また、山本さんの被爆体験談では、当時の生々しい話や、平和に対する強い思いを感じました。アメリカを憎んでいないのかという質問では、『憎んでいるけれど、戦争を起こした日本も反省するべき』と話され、戦争は、どちらかが悪いわけではなく、それぞれに責任があるのだということを学びました。

【平和記念式典】

平和を願う世界各国の人々が大勢集まり、厳粛な雰囲気の中で執り行われました。特に印象に残ったのは、子ども代表の言葉です。当たり前の生活に感謝することや相手の気持ちを考えることが世界平和につながることを改めて感じました。

【灯篭流し】

日本語だけでなく、世界各国の言葉で書かれた色とりどりの灯篭が元安川に浮かび、世界各国の方々の平和を強く思う気持ちや、戦争や原爆で亡くなった方を追悼する気持ちが感じられました。

【平和記念資料館】

当時の生々しい資料や写真、証言などがたくさんあり、決められた時間では見きれないほどでした。なかには泣いている方もいて、戦争や原爆の恐ろしさや、悲惨さを伝えていく決意を新たにしました。

中学生広島平和の旅へ行って

上板橋第三中学校　２年　宮城　優奈

私は、広島から数多くの事を学びました。実際に広島へ行くと、今まで見えなかった物(者)が、沢山見えてきました。

「ヒロシマ青少年平和の集い」での平和学習では、被爆体験者のお話を伺うことができました。その方がお話してくださった事は、私達の想像を絶するものでした。当時の広島にいた方々は、本当に苦しく、辛い思いをしたはずです。
原爆が投下した直後に生き延びても、徐々に現れてくる原爆症、生きたいと強く願っても逃げられない現実、生き地獄のような毎日。
私は、そんなお話を聞いて胸が痛みました。

また、平和記念式典や灯篭流しを体験して、今生きている私達も、被爆者の方々と繋がることができるのだ、と感じました。
広島の原爆のことを私達は決して忘れてはいけません。
もう二度とこのようなことが起きない為に、未来を生きる私達がそれを受け継ぎ、後世の人達に原爆の威力や恐ろしさ、命の尊さなどを伝えていかなければならないと思います。
その為にも、授業でもっと戦争などについて学び、ひとりひとりの認識を高めていく必要があると考えます。
そして、私も今回広島平和の旅に参加して自分の目で見て、感じてきたことを老若男女問わずに、一人でも多くの人に伝えていく作業を続けていきたいと強く思います。

最後になりますが、何でもない日常やお腹いっぱい食せる事、そして何より、こうして生きていることに感謝の気持ちでいっぱいです。
広島から、そんな事を教えられました。

広島平和の旅に参加して

桜川中学校　２年　島村 南々子

1945 年 8 月 6 日　午前 8 時 15 分。広島に原爆が投下され大勢の大切な命が一瞬にして奪われました。
［ヒロシマ青少年平和の集い］
はじめに、被爆体験者の山本定男さんからお話を伺いました。当時、中学 2 年生だった山本さんは長袖長ズボンを着ていたために無傷だったそうです。そのことは今考えると奇跡だったというお話が印象に残っています。真夏で暑かった為ほぼ裸で作業していた人は、全員やけどを負ったそうです。講話から「戦争は、二度としてはいけない」ということを強く実感しました。その後、現地の中高生ピースクラブの方々、福島県・長野県・東京都などの自治体生徒である同年代の小中高生と「原爆の記憶を風化させないためには」というテーマでディスカッションを行いました。SNS やインターネットなど、今の時代のツールを活かして、世界に向けて発信しよう等の話をしました。
［平和記念式典］
2 日目は、平和記念式典に参列しました。安倍晋三内閣総理大臣をはじめ代表の方々のお話を聴き、1 分間の黙とうでは、その場にいる全ての人が平和の尊さを考え、時代と共に風化されることがなく平和な世界が続くことを祈りました。夕方には、灯篭流しを行いました。灯篭には、それぞれの平和への思いを書き流しました。あたりが暗くなりとても幻想的な景色でした。
［平和記念資料館］
3 日目は、資料館や記念公園を回りました。資料館では、写真や当時の遺品、制服や救急道具、血だらけのタンカ、日記や薬、全身にヤケドを負った女性の写真などを目にして、強い衝撃をうけました。原爆を五感で感じる事が出来ました。原爆による被害は、私が想像していたよりも何十倍、何百倍もの恐怖や恐ろしさがあり、二度と同じ事を繰り返してはならないと強く思いました。
［まとめ］
原爆によって一瞬で全てが変わってしまう恐ろしさ。「平和」について考えることはこれまで少なかったけれど、今回広島平和の旅に参加させていただいて、平和とは、「みんなが心から笑顔になっている日常」だと感じました。1 日 3 食お腹いっぱい食べられる、家族や友達などの大切な人たちが近くにいる、そんな当たり前で普通だと考えている普段の生活がどんなに幸せなことかと学ぶことができました。今回広島平和の旅に参加して経験した事や学んだことを沢山の方へ伝えていきたいです。
最後になりましたが、このような貴重な体験させてくださった広島の皆様をはじめ、関係者の多くの方々、本当にありがとうございました。

Past and Future

赤塚第一中学校　２年　梁　雅琪

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島は、投下された原子爆弾「リトルボーイ」によって、一瞬にして地獄になった。たくさんの流血や助けを求める声が満ちた街は、想像を絶する恐ろしさである。

今年の夏、私は広島に行き、原爆について学んできた。

1 日目は、「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加した。被爆者の山本さんのお話を伺い、私がとても印象深かったのは、「原爆を投下したアメリカ軍を憎んでいますか？」という質問への答えだった。山本さんは「憎んでいません。戦争を起こした日本も悪いし、憎んでも何もならないから、未来に目を向けるのが大事。」と答えた。私はとても感動し、驚いた。確かに、未来に目を向けるのが大事。亡くなった方々を悼むには、その過ちを二度と繰り返さないことが大事だと思った。その後のディスカッションでは、「原爆について知る人が少ない。」という課題が出た。

2 日目は、平和記念式典に参列し、灯篭流しにも参加した。平和記念式典では、多くの外国人が参列しており、世界中の人が原爆について関心を持っていることが分かった。大勢の方々が黙とうを行い、たくさんの人が平和を祈っていることを実感した。平和への誓いの中で、「国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。みんなの『大切』を守りたい。」という言葉が心に残った。相手の立場に立って考えること、周りの人と仲良くしていくこと、それも小さな平和である。灯篭流しはとてもきれいだった。いろいろな国から来た人々は、平和への願いを灯篭に乗せて、広島の夜を明るくしていた。

3 日目は、平和記念公園や平和記念資料館を見学した。写真や遺品、被害を受けたものを見て、私は胸が締め付けられた。その衝撃は、ネット上の写真や文章を見るだけではわからない。原爆の子の像には、「これは僕らの叫びです、これは私たちの祈りです、世界に平和をきずくための。」という言葉が刻まれている。被爆から 74 年が経ち、その叫びや祈りを受け止めている人は少なくなっている。あるアンケートでは、全国で原爆が投下された日について聞くと、約 72%が不正解だった。唯一の被爆国として、この数字は恐ろしい。私は、さらに原爆と平和についてみんなに伝えないといけないと感じた。

今回の旅で、私は原爆の恐ろしさ、世界中の平和への思い、記憶をつないでいくことが課題であると分かった。これから、私は学んだことをたくさんの人に伝えていきたい。そして、自分の周りから、小さな平和を作っていきたい。

平和をつないでいくために

赤塚第二中学校　２年　中山　優羽

《ヒロシマ青少年の集い》

集いでは、山本定男さんの被爆体験証言を伺うことができました。原爆落下当時、山本さんは 14 歳で、爆心地から 2 キロ離れた東練兵場での畑の草取り作業のために集合していたそうです。また、山本さんが通っていた広島二中は爆心地に近く、学校にいた一年生は全員亡くなったと言います。体験を伺いながら当時のことを思い浮かべると、原子爆弾がどれほど恐ろしい兵器なのかということを再確認すると共に、核が世界にあってはならないと強く思いました。私たちのためにご自身の辛い体験を伝えて下さった山本さんに感謝しています。会の最後には、「原爆の記憶を風化させないためには」というテーマで、日本各地から集まったグループでディスカッションを行い、様々な意見をまとめたり考えを深めたりすることができました。

《平和記念式典》

式典では、広島市長をはじめ安倍総理大臣や、外国からのたくさんの方々、学生、一般の方、小さな子どもも平和を願い参列していました。また、こども代表の「平和の誓い」の中で、「広島の街が大好き」という言葉が強く印象に残りました。誰もが持っている大好きな街が失われることがあってはならないと思います。8 時 15 分の黙とうでは、強く平和を願いました。

《平和記念資料館》

ここでは原子爆弾開発についてのこと、原爆による被害や原子爆弾投下直後の写真などの資料、実際に見てみないと想像もつかなかったような被爆で亡くなられた方の衣服や所持していたものなどが展示されていました。被爆され、大怪我をした方の写真の中には目を背けたくなるようなものもありました。特に、自分より小さな子どもが大やけどを負っている写真には本当に心が痛くなりました。原爆の恐ろしさを物語る展示物の多くは寄贈されたものがほとんどです。亡くなった方や、その家族の悲しみや平和への思いが込められているように感じました。

《最後に》

今回 3 日間の広島平和の旅に参加し、平和について考え、自分の目で見たり、聞いたりするという貴重な体験をする事ができました。実際に見てみないと感じられなかったと思うことも沢山あります。しかし、これで終わりではありません。被爆者の方から聞いた事、見て感じたことを、戦争、原爆を経験していない人や、これから生まれる人たちへ【伝えていく】ことが必要です。今の平和に感謝しながら、自分の周りの人たちと和と大切に生活していこうと思います。

今の私ができること

赤塚第三中学校　２年　佐々木　いぶき

こんな言葉が心に残っています。『ヒロシマを知ることは未来を考えること』

1 日目の「ヒロシマ青少年平和の集い」では、被爆者の方のお話を伺ったり、他の地域の団体の方々と、平和とは何かを考えたりしました。

被爆者の方のお話は、当時の状況を詳しく、またその方が感じたことを、そのまま伺うことができ、とても学びのある時間となりました。お話の中でも、特に印象強く心に残っていることは、「アメリカを今でも憎んでいますか」という質問に対しての、被爆者の方の答えです。「許すことはできない。けれど、戦争をし続けた日本も許すことができない。」私はこれを聞いて、日本も許されないことをしたのだと、改めて痛感しました。まずは、一刻も早く世界から核兵器をなくしたいと思いました。

2 日目は、平和記念式典に参加しました。雨が降る中、式典には子供から大人まで多くの人々が参加していました。海外から訪れた方もたくさんいました。私は、世界から注目されていることを感じ、驚きと同時に嬉しくも思いました。平和を願う気持ちは、この場にいる全員が同じだと思ったからです。

夜には原爆ドーム前の川に灯篭を流しました。灯篭流しには、「慰霊」と「平和への祈り」の 2 つの意味があるそうです。暗闇の中、色とりどりに光る灯篭を見て、10 年後も 20 年後も、平和を祈って灯篭を流せたらいいと思いました。

3 日目は、平和記念資料館に行きました。どの展示物も原爆の悲惨さを物語っていて、思わず目を背けたくなりました。多くの展示物のなかで、私は「お弁当箱」が印象に残りました。このお弁当箱をお腹に抱えて、こどもが亡くなっていた、とバスガイドの方から聞きました。お母さんのお弁当を楽しみにしていたこども。その命が突然奪われた事実に、心がしめつけられました。展示されていたお弁当箱の中には、おかずが灰になって入っていました。原爆の威力と、亡くなった方の思いを伝える貴重なものだと思いました。

私は事前学習で、広島について調べ、学習しました。そして実際に広島に行き、3 日間の貴重な体験を通して、平和の尊さや原爆について知ることができました。それは、事前学習では学べなかったことばかりでした。私は、今回の旅で学び、感じたことを、周りの人に伝えていきたいです。それが、今自分にできること、平和につながる第一歩だと思います。私は広島を知り、これからのことを考えることができました。貴重な経験をさせてくださった関係者の方々や先生方、ありがとうございました。

これから私たちにできること。

高島第一中学校　２年　舟山　由奈

8 月 5 日私たちは、「広島平和の旅」に行きました。広島に着いて最初に「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加しました。ここでは、被爆体験講話を聞き、「原爆の記憶を風化させないためには」という題でグループディスカッションをしました。現在被爆者の平均年齢が約 82 歳となっており、被爆体験講話がとても貴重な体験になってきています。被爆者の方から直接お話を伺うというこの貴重な体験ができなくなったら、原爆の悲惨さや平和の尊さが、みんなの心からうすれてしまいます。それを防ぐためにどうしたら良いのかを話し合いました。私たちのグループで出た案は、「今なお後障害（こうしょうがい）に苦しんでいる人への募金活動をする」という意見や、「インターネットで、原爆のことを伝えていく」などの意見が出ました。そしてそれを、発表し合いワークショップは終わりました。

2 日目は、平和式典に参列しました。8 時 00 分に開会式が行われ、原爆死没者名簿奉納・献花、・黙とうの後、平和の鐘が鳴らされ、広島市長からの平和宣言がありました。私は、広島市長が読まれた当時 15 歳だった女性が「一人の人間の力は小さくても弱くても、一人一人が平和を望むことで、戦争を起こそうとする力を食い止める事ができると信じています。」という言葉が心に響きました。市長はこの「当時 15 歳の女性の信条を単なる願いで終わらせてもよいのでしょうか」と言っていました。今これを読んでいるみなさんは、どう思いますか？　私は一人でも多くの人がこれからの平和を願って欲しいと思いました。今回の平和の旅で、自ら広島、長崎に行ってみるなど自主的に戦争について触れて見ることが大事だと思いました。

現在も世界のどこかでテロや戦争が起きています。私たち一人一人が少しでも早く世界が平和になれることを一生懸命に考え、そして実行しましょう。その「世界を平和にしたい！」という思いは必ずみんなに伝わります。私もいろいろな活動について関わっていきたいです。こんなにも、世界の平和について考える事ができたので、また広島に行きたいと思いました。このように平和について学べる機会を与えてくださった関係者の方々に「感謝」いたします。他校との交流ができ、仲良くなった友達もできました。貴重な体験でした。来年行く後輩にとっても貴重な旅になればと思います。私たちにできることは、戦争の悲惨さ・平和の尊さを伝えていくことです。平和の大切さを学び、この学んだ事を他のみんなに伝えて行かなければなりません。武田先生が言われていた通り長い旅になるようですが、それを実行していきます。

これが私たちにできることです。

平和への願い

高島第二中学校　２年　水野　いおり

「生き延びた方々の心身に深刻な傷を負い続ける
被爆者の訴えが皆さんに届いていますか」

【国立広島原爆死没者追悼平和祈念館】

被爆者体験映像で、一番印象深かったのは、被爆者である幸恵さんの話でした。爆心地付近に 3 人の友人と逃げ続けましたが、「死ぬる」と言って、友人たちは次々に手を放し死んでいきました。幸恵さんはひどい火傷を負い、「黒い雨」を「恵の雨」だと両手ですくって口に入れました。それからは連日吐血が続き、意識が朦朧としたときに、軍人に助けられ病院に運ばれました。そこでは治療はしてもらえましたが医療品が足りずに後回しにされてしまい、最後に念仏を唱えて静かに亡くなったそうです。これを観て、原爆の悲惨さ、恐ろしさ、大切な人たちを亡くす悲しさを実感しました。

【平和記念式典】

安倍総理をはじめ海外からも多くの方々が参列していました。広島市長の「平和宣言」を聞いて、『未来を担う若い人たちが、原爆や戦争を単なる過去の出来事と捉えず、また、被爆者や平和の世界を目指す人たちの声や努力を自らのものとして、たゆむことなく前進していくことが重要となる』という言葉が強く心に響きました。

【平和記念資料館】

本年 4 月にリニューアルされ、原爆当時の写真や動画、遺品などが展示されています。さらに焼野原になった街の写真を背景に、熱線で曲がった鉄骨、被爆した子どもたちの衣服、遺体や火傷を負った人々の写真などを増やして、原爆投下直後の広島を再現しており、よりリアルな悲惨さに心が締め付けられました。被爆した方々は、どんなに怖く、辛く、悲しかっただろうか、そう思うと核兵器は使ってはならないと強く思いました。

【最後に…】

私はこの旅に参加して、いろいろと見聞きすることで「命の重さ、尊さ」について実感し、こんなことが起こってしまったことを悲しく思いました。民放テレビ局では、式典の放映や特集をしているところはなく、被爆国である日本の辛い記憶を風化させていると感じました。被爆者平均年齢が 82 歳を超えた今、広島の高校生がモノクロ写真をカラー化して、当時の状況を再現しているように、私たちが受け継いでいかなければならないと実感しました。最後に、このような貴重な体験をさせていただき、とても感謝しております。本当に有難うございました。

ヒロシマ～現地でしか分からなかったこと

高島第三中学校　２年　眞壁　愛莉

私はこの広島平和の旅を通して、本やインターネットではわからない、現地でしか得られない経験をすることができました。

＜被爆体験証言＞

話をして下さった山本定男さんは、14 歳の時に爆心地から約 2ｋｍ離れた所で、草取り作業をしていた時に被爆しました。山本さんはその時、顔の半分に火傷を負ったそうです。遠く離れた場所でも火傷を負う事実に、改めて原爆の威力に驚き同時に、恐ろしいものだと感じました。また、「原爆を落としたアメリカを憎むか」といった質問に対し、「許すことはできないが、戦争に参戦した日本も反省すべき」とおっしゃっていました。私はこの反省を生かし、二度と戦争を起こしてはならないと改めて思いました。そして、被爆者の方々の平和への願いを、ただの願いで終わらせてはならないと強く思いました。

＜原爆ドーム＞

私は初めて、原爆ドームを見ました。写真では何度も見ていましたが、実際に見ると生々しく、原爆による被害の大きさを感じました。また、あの日に原爆ドーム(当時は広島県産業奨励館)の中にいた人々の叫びが聞こえるような気がして、胸が痛くなりました。

＜平和記念資料館＞

資料館の展示品は、どれも鳥肌が立つほど衝撃的でした。中でも印象的だったのは、当時 28 歳の宮谷正徳さんが身につけていた、血が染み、所々が焼け焦げたズボンです。正徳さんは頭や顔、背中に大火傷を負っており、家族に「殺してください」と頼むほど苦しんだそうです。生きることではなく、死ぬことを選ぼうとする、こんなに切ないことがあるでしょうか。私は、原爆によってここまで苦しんだ人々のことを考えると、胸が締め付けられました。

＜最後に＞

私は被爆地広島で、原爆の恐ろしさと平和の尊さを痛感しました。友達や家族と笑いあえて、夜、安心して眠ることができて、おいしいご飯が食べられる日常。これこそが平和だと気づかされました。平和な日常をただ過ごしていた私は、どこか戦争を他人事のようにとらえ、平和について深く考えていなかったように思います。でも、これからは平和をただ「願う」のではなく、「創る」人になりたいです。そして、広島という地が教えてくれたことを、次は私が世界に発信していきたいです。あの日のことを伝えられる人が少なくなっている今、原爆の恐ろしさと共にその不要性を沢山の人に伝えていきたいと思います。

第２部

第９回 中学生長崎平和の旅

平和祈念像前にて

参加生徒

板橋第一中学校	岡田　育実	志村第四中学校	梶野　彩葉	桜川中学校	奥山　夏帆
板橋第二中学校	峯尾沙也夏	志村第五中学校	菊地　璃乙	赤塚第一中学校	本郷　煌惺
板橋第三中学校	福田　百花	西台中学校	岡村　美保	赤塚第二中学校	小泉　摩耶
板橋第五中学校	中村　香女	中台中学校	戸谷ひより	赤塚第三中学校	藤本　健太
加賀中学校	八島　亜依	上板橋第一中学校	内山　柚穂	高島第一中学校	工藤　結菜
志村第一中学校	清水　瑞心	上板橋第二中学校	湯浅　結月	高島第二中学校	佐藤　琴音
志村第二中学校	田畑　杏梨	上板橋第三中学校	鈴木紗永子	高島第三中学校	深田　結希
志村第三中学校	冨樫　歩夢				

引率者

板橋第二中学校　大沼　文雄校長（団長）　本多　茂樹教諭（指導員）　佐藤　歌奈子教諭（指導員）

中学生長崎平和の旅　行程表

実施期間　令和元年８月８日～１０日（２泊３日）

８月８日（木）

時　間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所　発
8:40	羽田空港　着
9:50	羽田空港　発
12:00	長崎空港　発（観光バスで平和公園へ）
13:10	平和公園　着
13:40	★青少年ピースフォーラム受付
14:00～17:00	★開会行事（被爆体験講話） ★被爆建造物等のフィールドワーク（浦上天主堂コース）
17:20	平和公園　発
18:20	ホテル　着
19:15	夕食
22:00	就寝

８月９日（金）

時　間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:30	ホテル　発
9:30	平和公園　着
10:35～11:45	平和祈念式典参列
12:00	昼食
13:30～16：15	観光
17：00	ホテル　着
18：00	夕食
19：00	学習会
22:00	就寝

８月１０日（土）

時　間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:10	ホテル　発
9:00	原爆落下中心地　着（献花、折鶴奉納）
9：30～11：00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
11：10	長崎原爆資料館発
12:00	昼食
13:00	長崎空港　着
13:35	長崎空港　発
15:25	羽田空港　着
15:50	羽田空港　発
17:30	板橋区役所　着・解散式

★は青少年ピースフォーラム事業（長崎市主催）

実体験の大切さ

第９回中学生長崎平和の旅
団長　　大　沼　　文　雄
（ 板橋第二中学校長 ）

１９４５年８月９日、原爆投下直前１１時の天気は快晴、直後正午の気温は「２９．４℃」、天気は「不明」と長崎測候所には記録が残っているそうです。被爆直後の記録が残っていることには驚かされます。私たち一行が長崎を訪れた８月８日も、とても暑い日でした。空港から市内に入り、平和公園で準備中の式典会場や慰霊碑等の見学を終え、「青少年ピースフォーラム」の会場に到着した時には、区で用意していただいた水分補給用のペットボトルは空になり、生徒には追加の飲み物を購入させたほどでした。

さて、私が今回の平和の旅で最も強く感じたことは、その暑さの中で積み重ねた「実体験の大切さ」です。私は、３０年ほど前に広島を観光した際に、原爆ドームや平和記念公園、平和記念資料館を訪れたことがあります。月日を経て、中学生を引率して「長崎」という被爆地を実際に訪れてみて、改めて「命や平和の尊さ・戦争や原爆の悲惨さ」について深く考えさせられ、広島を訪れたとき以上の衝撃を受けました。特に「自分の目で見る・耳で聞く・肌で感じる」ことが、いかに大切なのかを痛感しました。自分なりに下調べをする中で、様々な資料に目を通したつもりでした。しかし、１日目の「青少年ピースフォーラム」と２日目の「平和祈念式典」で生の声として聞くことができた「被爆体験者の話」は、まさに当時の様子が目の前で繰り広げられている映像を見ているようでした。また、１日目と３日目に、ボランティアの方々に案内され巡った「原爆投下・被爆」の被害が残る場所や原爆資料館で、実際に目にした様々な展示物から受けた衝撃は、決して忘れることができません。事後学習での各校代表生徒の感想も同様でした。

広島と長崎に原爆が投下されてから７４年。今回、長崎に行き「実際に被爆を体験した人が少なくなってきた。現在を生きる私たちが、次の世代にこの『平和への願い・原爆の悲惨さ』を継承しなければいけない。」という言葉を何度も耳にしました。私たちを案内してくれたボランティアの学生や被爆２世の方も強く訴えていました。そうした声を実際に耳にし、平和祈念式典に出席して現場の雰囲気を肌で感じたことで、「原爆や戦争の悲惨さ」について、より一層強烈な印象となりました。

この貴重な体験を与えてくださった板橋区関係者の皆様、３日間だけではなく準備から献身的に取り組んでくれた随行職員の皆様に感謝いたします。

今回の平和の旅で、生徒は普段の生活では味わうことができない貴重な体験を積み重ねました。同時に、参加生徒には、「実体験したことを伝える＝伝承」という使命が生まれました。各校を代表して参加した２２名はそのことをしっかりと自覚して、自分自身が体験したことを自分の言葉で、中学校や地域でしっかりと伝えてくれるはずです。そして、彼らが発する言葉から、一人でも多くの方が「平和の尊さ」について考えを深め、「平和都市宣言」を行っている板橋区から全世界に発信されることを願っています。

戦争の恐ろしさ

板橋第一中学校　２年　岡田　育実

74 年前、長崎に一発の爆弾が落とされました。その爆弾が落とされると、一瞬で長崎は焼け野原になりました。

青少年ピースフォーラムでは、築城昭平さんが原爆体験談を話してくれました。「広島に原爆が落ちた時、こちらにはあまり情報が来ず、まあ、何人か死んだのだろうと思った。」私はこれを聞いて、皆、人が死んでいくのに慣れてしまったんだな、と思いました。今では人が一人亡くなっただけでも事件なのに、戦時中は数人は当たり前、という事に驚きと同時に恐怖心もわきました。

また、原爆資料館では、原爆のひどさ、残酷さが目で分かりました。けがをした少年の写真や、亡くなった方々の衣類などが展示されていました。

一番印象に残ったものは、ガラスの中にある人の骨です。原子爆弾の衝撃で飛び散ったガラスが、熱で溶けて、人の骨を包み込んで固まったのです。最初は何だろうと思いましたが、ガイドの方の説明を聞いてとても驚きました。

このように、原爆や戦争はとても恐ろしいものですが、今はあまりそういう意識を持っている人が少なくなっているようです。今では、世界の核弾頭数が 1 万 3800 個にも上ります。たった一発でもこんなに被害がでるのに、こんなにたくさんの核爆弾がすべて地上に落とされたら、どうなるでしょう。人類や地球が滅びるかもしれないのです。核爆弾がこんなに存在するのは、進歩ではなく後退だと思います。同じ過ちを繰り返してしまう可能性があるからです。

長崎を最後の被爆地にすることはできないのでしょうか。私達は被爆もしていないし、放射線による後遺症などもありません。だから、原爆の悲惨さを実感することはとても難しいと思います。

私も、最初は自分のイメージだけで「原爆後はこういう感じなのだろうな」と思っていましたが、被爆者のお話はもっと悲惨なものでした。それでも、私の考えていることと実際の体験では、体験の方がもっとひどく恐ろしかったことでしょう。

私達が戦争や核爆弾のない平和な世界をつくるためには、できるだけ多くの人が、実際に原爆資料館を見て、被爆者の方々のお話を聞いて、少しでも戦争の悲惨さを知ること、感じることが大切だと思いました。

平和を夢見て

板橋第二中学校　２年　峯尾　沙也夏

今から 74 年前の 1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分、この瞬間に長崎の姿は変わり果ててしまいました。たった一発の原子爆弾で、一瞬にして長崎の町は黒く、赤く染まってしまいました。私が知っていたことはこのくらいでしたが、実際に現地に行って学習してみると核兵器の恐ろしさ、命の尊さを身に染みて感じました。

平和祈念式典に参加した際、長崎市長の長崎平和宣言を聞くことができました。その一部に"原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました”という言葉がありました。全ては人の意思で過ちを犯したのだと改めて感じることができた一言でした。

“あの青い空さえ悲しみの色”

“こよなく晴れた青空を悲しいと思う”

これは「もう 2 度と」・「長崎の鐘」の歌詞の一部です。考えてみるとこの日の空は青く快晴で、そんな空さえも原子爆弾によって一瞬にして黒く染まり、それと共に多くの人が大切な人を失いました。

終戦後も人々は後遺症に苦しみ続けています。現在もなお治療中の方もいます。原爆がもたらしたものは、人々に一生傷を残し続けているのです。今年で被爆死没者数は 182,601 人になりました。後遺症により若くして亡くなってしまう人も多かったそうです。

今の幸せがどれほどのものなのかきっと自分が死んでもわからないと思います。それは今の日本の平和が自分にとってあたりまえになっているからです。しかし 74 年前の一発の原子爆弾により一瞬で平和は砕け散りました。だからこそ平和について考え続けることに意味があるのだと思います。

今回、長崎平和の旅に参加して、核兵器の恐ろしさ、命の尊さ、人々がどれほど平和を望んでいるのかを知ることができました。このことをさらにいろんな人に伝え、戦争の無意味さを世界にまで伝えられたらいいと思います。私はこれから世界から核も戦争もなくなるよう、被爆者の方々と共にこのことを次の世代に語り継ぎ、より平和について深めていきたいと考えています。

『ナガサキ』から伝える。

板橋第三中学校　２年　福田　百花

1945 年 8 月 9 日、11 時 2 分。

ナガサキに原子爆弾が落とされました。「ファットマン」と呼ばれる原爆は、沢山の命と日常を奪っていきました。その強い威力によって、落下点付近の地表温度は太陽黒点と同じ（約 4000℃）にもなったと言われています。

【青少年ピースフォーラム】

被爆体験講話では、被爆当時 18 歳だった築城昭平（ついきしょうへい）さんからお話を伺いました。築城さんは、爆心地より約 1.8ｋｍ離れた寮で被爆し、全身に火傷を負ったそうです。体は焼けただれ、神経や肉がむき出しになっている状態でした。築城さんは親戚の人の下で治療を受けましたが、被爆者が多いため病院の薬は底をつき、治療を受けられなかった人々が亡くなっていったそうです。近所の人や身近な人が次々と死んでしまうのはどんなに辛いことだろう、と聞いているだけで悲しくなりました。
築城さんは「核がなく、人権の保障される世界を造って欲しい」とも仰っていて、私は皆に原爆のことを伝えなければいけないと感じました。

【平和祈念式典】

式典には大勢の人が集まりました。私は、遺族の方や日本人だけでなく、他国からも人が訪れていることに驚きました。ニュースなどで見ると非核化の動きは一向に進んでいない気がするけれど、私たちが発した思いは届いているのだと、それを見て実感しました。黙祷では、その場にいる全員が平和を願っていることが伝わってきました。こんなにも各国民が平和を願っているのに、何故戦争を起こしてしまうのだろうと言葉を失いました。

【長崎原爆資料館】

右の写真は、11 時 2 分を指して止まった振り子時計です。残っているということは、時計が爆心地から離れていたことを意味しています。にもかかわらず原爆投下時刻で止まっているのは、爆風が一瞬でここまで来たということだと思います。この爆風が街を焼き払っていったのだと考えると、より一層非核化運動を強化しないといけないと感じさせられました。

長崎を最後の被爆地に

板橋第五中学校　２年　中村　香女

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 02 分、たった 1 発の原子爆弾が長崎に投下され、あたりまえの日常が奪われ 7 万 4 千人もの尊い命が失われました。

●被爆体験講話

被爆体験講話では、当時 18 歳で被爆した築城昭平さんにお話を聞かせていただきました。築城さんは夜勤前の睡眠中に被爆しました。左腕と左足先を負傷し、その後放射線により原因不明の病気にもかかりました。また、築城さんは「世界中の人々に核兵器の怖さを知ってもらい、世界中から核兵器をなくしてほしい」と話されていました。実際に被爆者の話を聞くと、想像していたのをはるかに超える核兵器の怖さを知ることがき、「今後核兵器による犠牲者を出してはいけない」と強く思いました。

●平和祈念式典に参加して

平和祈念式典では、被爆者の方が日本政府に世界で唯一の被爆国として「核兵器をなくそう」と呼びかけてほしい、と話されていました。長崎市長は、すべての国のリーダーの方に向けて、「被爆地を訪れ、原子雲の下で何が起こったのかを知ってほしい。核保有国のリーダーは、核兵器をなくし、NPT の条約の意味をもう一度思い出してほしい」と訴えていらっしゃいました。広島・長崎をはじめ、日本国民の核兵器がなくなってほしいという強い思いが世界中の人々に知ってもらえたらいいなと思いました。

●最後に

長崎平和の旅に参加して色々な事を学ぶことが出来ました。被爆者の方などの話を聞いていてほとんどの方が口にしていた言葉があります。それは、「長崎を最後の被爆地に」という言葉です。私はこの言葉を何度も聞き、その度に被爆者などの方々の強い思いを感じました。これから私たちがこの思いを引き継いで長崎を最後の被爆地にするため、今回学んだことを次の世代の人々に伝えていきたいです。

永久平和という願いが叶いますように...

次のステップへ

加賀中学校　２年　八島　亜依

ケロイドだけを残してやっと戦争が終わった
だけど…
父も母も　もういない
兄も妹ももどってはこない

　これは平和祈念式典の長崎平和宣言で聞いた、原子爆弾により家族を失い、自らも大けがを負った女性がつづった詩の一部です。皆さんは 17 歳でこんな詩が書けますか？
こんな、悲しみなのか怒りなのかわからない、複雑な気持ちを読み手に連想させる詩が書けますか？
私はこの平和の旅での 3 日間で原爆がどれだけ悲惨なものか感じ、戦争や平和についての考えを深めることができました。そして旅のなかで、改めてこの詩を見たときに、私が知らなかった、被爆者の心の一面を見た気がしました。私にはとても真似できない表現だと感じました。
　式典が終わった後、私は席を離れて式典の写真を撮ろうと、前の方へ行きました。前の方には遺族席という紙が貼られている椅子がたくさんありました。予想以上に遺族の方が多いことに驚くと同時に、胸が押さえつけられているような、いたたまれない気持ちになりました。さらに前へ行き、平和祈念像を見ていると、よぼよぼとした足取りで高齢のおばあさんが歩いてきて、小さな箱の中から震えた手で丁寧に 1 本、そしてもう 1 本とお線香をくれました。「これ、あげて。ぴかどんはみーんなもっていっちゃったんだから。」お礼を言い、別れた後もおばあさんはバッグの中からもう 1 箱、新しい線香の入れ物を出していました。それだけ原爆の被害を受けた方に強い思いがあることがわかり、少し哀れになりました。原爆の被害を直接受けてなくても人が亡くなれば悲しいのは当たり前です。ましてや、身内の人ならもっと…。

線香を貰った様子

　中学に入学した頃から『チャンス、チャレンジ、チェンジ』という言葉を大切にしてきました。約 1 年をかけて、やっとここまで成長することができました。この 3 日間は平和とは何か、そして原爆について考える良い機会となりました。そして次は『伝える』という新しいステップへ行きたいと思います。時代が変わった今、原爆の恐怖を後世に伝えていく人はますます減っていくでしょう。そんな時代だからこそ、被爆者の方から話を聞くことができた私たちが、後世に語り継いでいくべきだと思いました。

“核のない地球”を望むべき私たち

志村第一中学校　２年　清水　瑞心

「戦争のため、正義のため勝たないといけないと思った。」
　一日目の被爆者体験講話で当時 18 歳だった築城昭平さんが言っていた言葉だ。築城さんは学生だったにも関わらず、勉強はせずに、学徒動員されて軍需工場で働いていた。そう、戦争のため。今でこそ日本は戦争をしないが、たった 74 年前まではしていたのだ。私は今回の長崎平和の旅で、戦争に対しての意識が変わった。それを皆に伝えたい。築城さんは、**「長崎市民は世界の核廃絶を望んでいる。」**とも言っていた。この言葉は平和の旅の三日間、毎日聞くことになった。
　二日目は平和祈念式典へ行った。式典が始まる前、被爆者の方々が合唱するために出てきた。その時、歌っていた歌で心に残った歌詞がある。それは、**「核のない地球を求めて生きてゆこう」**という歌詞だ。**“核のない地球”**。この言葉は長崎の人々にとっての目標なのだろう。否、彼らにとっては、**“核のない地球を目指すのが、日本、世界中の人々の目標になってほしい。”**という願いかもしれない。
　三日目は、地元ボランティアガイドによる原爆関連施設の見学をした。私は長崎原爆資料館が特に印象に残った。施設に様々な工夫が凝らされていたからだ。螺旋スロープのところでは、現在から 1945 年へと下に降りるにつれて壁の数字が小さくなっていっていた。まるで 1945 年まで時を遡っていくかの様だった。館内では始めに、**永遠に 11 時 02 分を指す柱時計**が出迎えてくれた。その先は驚きの連続だった。黒焦げになった弁当、頭蓋骨の一部がくっついたヘルメットなど。恐怖が私を襲った。だが、原爆を目の前にした当時の人々にとっては、恐怖どころではないだろう。言ってしまえば**“生き地獄”**、それくらいのものだったのだろう。話に聞いていのると目の前にするのでは、感じることが全く違うのだとわかった。ここで、驚愕の展示があった。それは壁一面に、今までに核実験が行われた年と回数が書かれているというもので、その回数があまりにも多く、衝撃を受けたのだ。この展示でボランティアの方は**「皆が核廃絶を望んでくれるようになってほしいです。」**と言っていた。やはり、長崎の方々はそれを強く望んでいるのだと感じた。
　ここでも心に残った言葉がある。**「私たちは、微力だが無力じゃない。」**という言葉だ。これは長崎の高校生たちが、平和のための署名集め運動をした時の彼らの合言葉だ。一人ひとりが、少しの力しか持たなくても、何もできないわけではない。平和の尊さを次世代に伝えていく我々に、大切なことをこの言葉は教えてくれた。
　核のない地球を望み、作り上げることが私たちにとって大切なことだと思う。**「私たちは、微力だが無力じゃない。」**を胸に刻んで、私は周りの人に核の脅威と平和の大切さを伝えていきたい。

長崎を世界最後の被爆地に

志村第二中学校　２年　田畑　杏梨

【はじめに】

74 年前の 1945 年 8 月 9 日 11 時 2 分、長崎に一発の原子爆弾が落とされ、長崎のまちをモノクロの世界に変え、人々の日常、笑顔、そして命を一瞬にして奪いました。

【被爆体験講話】

私たちは、被爆当時 18 歳だった築城昭平さんのお話を聞きました。

築城さんは長崎師範学校に在学中でしたが、軍需工場へ学徒動員されていました。爆心地から 1.8 ㎞離れた学校の寮で、当日の夜勤に備えて睡眠している際に被爆し、全身に火傷を負いました。被爆時、築城さんは爆弾の爆発により飛んでくるガラス片から身を守るため、普段から寝るときに頭からすっぽりと布団を被っていたそうです。これにより被害が少なく済み、生き残ることができたとのことです。被爆者の中でも、このように小さな奇跡が生死を分けました。ですが、生存された方の中にも、放射線による被害などにより、その後も苦しむ人々がたくさんいました。築城さんは「戦争は人を苦しめるだけ」「世界中の人に核の怖さを知ってほしい」とおっしゃっていました。被爆者の方から実際の被害の様子を聞き、戦争の怖さ、悲惨さを伝えていかなければならないと感じました。

【原爆資料館】

資料館には、長崎に原爆が投下された 11 時 2 分で止まったままの時計や、被爆後の写真などが展示されています。中でも最も私の印象に残ったものは、「女子学生の弁当箱」です。これは、爆心地から約 700mの距離にある岩川町で被爆した堤郷子さんの遺品です。弁当箱の中のお米が炭化しています。戦争中ではありながらも、いつも通り生活していた中で原爆が投下されたことが伝わってきます。日常の生活、いつも楽しみにしていたであろうお弁当を食べる時間、そういった当たり前の幸せが一瞬にして奪われる、それは被爆した方にしかわからない、私たちの想像を遥かに超えた怖さだったと思います。

【最後に】

私は今回長崎に行くまでの間に、戦争の事や原爆の事を勉強してから現地に行ったわけですが、実際に現地に行き、被爆者の方の話を聞き、資料館で被爆の悲惨さを目の当たりにしたことによって、現地に行く前と比べて、戦争や原爆に対する意識がまるで変りました。こうして「知る」ということが人々の意識を変えるのだと思います。日本は唯一の被爆国です。原爆がいかに恐ろしいものかを知り、理解し、世界中の人々に戦争の怖さを伝えていくことが日本国民としての役目だと思います。“長崎を世界最後の被爆地に。”

原爆を「伝える」、「知る」、「考える」

志村第三中学校　２年　冨樫　歩夢

私は戦争に関わる映画を観たのがきっかけで、原爆や戦争について関心をもった。原爆や戦争についてもっと深く学びたいと思っていた時、この「長崎平和の旅」を知った。原爆が生んだ惨状を実際にこの目で見て、触れて、感じる事ができる。その体験を多くの人に伝えられる。なかなかない機会だ。私はあまりテレビで報道されない長崎への原爆投下について目と耳と心で学び、それを多くの人に伝えるため長崎に向かった。

《青少年ピースフォーラム　被爆体験講話》

18 歳の時に被爆した築城　昭平さんが、戦時中の大変な生活や、原爆投下当時の状況についてお話して下さった。家族と離れ学校の寮で生活していた築城さんは、なんと 1 日 12 時間工場で働かされていた。遊びも勉強もできなかった。食料が少なく、ご飯はかぼちゃを一口食べるだけ。今では信じられないような生活だ。戦争は人々の平和な暮らしをも奪う邪悪なものなのだと再認識した。

原爆の熱線により火傷を負い、全身が真っ赤になった。体の神経が見えていた。3 ヶ月程寝たきりだった。信じられないような自身の体験を私達に話して下さった築城さんは、「被ばくしていない人も被ばく者の心を受け継いでいる」「長崎市民は『核を全てなくす』という思いでいる」と語った。築城さんのような、私達に辛い被ばく体験を話して下さる方々のために、未来の子供達のために、私達も長崎の皆さんと同じ「核を全てなくす」という強い思いをもたなければいけないと思った。

《平和祈念式典》

被爆者のみで結成された『被爆者歌う会「ひまわり」』による「もう二度と」という曲の合唱から始まる平和祈念式典。着々と式は進んでいき、あの日から 74 回目の 8 月 9 日 11 時 2 分がやってきた。「黙とう」の声とともにサイレンが鳴り、長崎は祈りに包まれた。人の声は一切聞こえない。74 年前のこの時間、ここはもっと静かだったのだろう。私の心は 1945 年に飛んでいった。苦しむ人々の姿が目に浮かぶようだ。どうか亡くなった方々の魂が安らかでありますようにと祈った。そして未来に想いを馳せた。核兵器のない世界。平和な世界。その実現のためには、何をすればいいのだろう。

《私達がすべき事》

原爆で多くの命が失われた。今でも、火傷の痕がもりあがるケロイド、原爆の放射線によるガンや白血病等に苦しむ人がいる。それなのに、未だ世界には約 14,450 発もの核兵器があるといわれている。長崎を最後の被爆地にするためにはどうすればいいのか。まず戦争や原爆について「知る」事が大切だ。その手助けをするのが、私達平和の旅の参加者だ。現地に行ったからこそ分かる原爆のむごさを、私達が「伝える」。平和とは何か？世界に原爆は必要なのか？私達の発表が、あなたがこれらの問いについて「考える」きっかけになれば嬉しい。

長崎の思い

志村第四中学校　２年　梶野　彩葉

私は様々な平和事業に参加しました。その中でも特に印象に残ったのは被爆体験者の築城　昭平さんが語った被爆体験です。核という恐ろしいものを人類はなぜ手放せないのか。それは核を所有することで他国がうかつに侵入することを防ぐ事ができると考える国もあるからです。しかし築城さんはそうした国が核を使って戦争を始めるのではないか心配しています。世界の人にもっと核兵器について知ってほしい。「核兵器について心の底から考えてほしい」という築城さんの思いを私たちは次の世代に伝えて行かなければならない責任があることを改めて感じました。また、私は、原爆資料館を訪れ、とても悲しい気持ちになりました。こんなことがこの街で 74 年前に起きたとは思えませんでした。黒焦げの死体や、溶けたガラス。原爆の恐ろしさは私が思っていたものよりもっと恐ろしく、もっと怖いものでした。写真に写った夫婦。この写真は原子爆弾が落とされる前に撮られた写真でした。この夫婦のその後はわかりません。しかし、戦争や原子爆弾によって家族や友人がなくなった人が大勢いたのは確かです。家族と一緒に安心して暮らせるということはとても幸せなことで、感謝しなくてはいけないなと思いました。

私は実際に被爆建造物を見たり、被爆体験者の話を聞くことができました。実際に行ってみないとわからないことや、被爆体験者の話を聞いて考えたこと、

命の大切さについて多くの人に伝えていき、今の幸せが当たり前のことだと思わず、感謝して過ごしていきたいです。

74 年前の記憶を訪れて

志村第五中学校　２年　菊地　璃乙

全ての日常が奪われたあの日、被爆された人たちの目の前にはどのような光景が広がっていたのでしょう。今までの私は、なんとなく頭では知っているつもりでも、漠然としていて、具体的に思い描くことができませんでした。でも、平和の旅に参加し、体験者の話を聞き、祈念式典に参加し、資料館を見ることによって、私が想像していたよりも、もっと悲惨な 74 年前の現実を知ることができました。

≪被爆体験講話≫

74 年前の 8 月 9 日、午前 11 時 2 分、一発の原子力爆弾が長崎に投下されました。当時 18 歳だった築城昭平さんは、爆心地から 1.8 ㎞の場所で被爆し、全身に大火傷を負いました。ふらふらしながら防空壕へ行くと多くの火傷をした人でいっぱいで、地獄のようだったそうです。「世界全体が核兵器のことを知れば、平和は築ける。そのために、被爆者は命の限り、若い人、そして世界の人に自分の体験を伝えている。」そうおっしゃっていたことが心に残りました。唯一の被爆国として、このことは絶対に、未来へ繋げていかなければいけないと強く思いました。

≪平和祈念式典≫

長崎の平和祈念式典では、献花の前に献水がありました。「熱い、水をくれ。」そう言いながら亡くなっていった大勢の人たちのことが、生き残った人たちの記憶に残り、一般的な献花の前に、お水を供えて供養するそうです。

長崎市長の平和宣言の中で「原爆は、人の手によって作られ、人の上に落されました。だからこそ、人の意志によって、なくすことができます。そして、その意思が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人一人の心の中です。」とおっしゃっていた言葉に、私たちができる小さな一歩は、やがて大きな一歩になると強く感じました。

≪最後に≫

残念ながら人の命には限りがあります。実際に原爆を体験した人々が、ずっと話を伝えていくことはできません。でも、その人たちの記憶を聞き、聞いた私たちが伝えていくことは可能です。74 年前にも、私たちと同じように、勉強し、友達とおしゃべりをする日常を送る中学生が沢山いたはずです。みんな、沢山の夢もあったはずです。その人たちの未来が一瞬で奪われた悲劇を、二度と繰り返さないよう、唯一の被爆国である私たちができることは、この悲惨な記憶を未来へ繋いでいくこと、平和に感謝し守っていくことなんだと、改めて思った旅でした。

私たちができることは、まず知ること、そして、それを伝えていくこと、それが平和な未来への第一歩です。

“もう二度と作らないで　わたしたち被爆者を”

西台中学校　２年　岡村　美保

８月９日に行われた長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で、被爆者合唱団「ひまわり」による『もう二度と』という曲の合唱がありました。
上記タイトルはその曲の一節です。歌詞や歌声からは、被爆された方々の平和への願いが強く感じられ、私はとても感銘を受けました。

それにしても、こんなにも被爆された方々が、長崎・広島が、日本が「世界恒久平和」「核兵器廃絶」の実現を訴え続けているにもかかわらず、世界では争いが絶えず、今なお約 13,880 発もの核兵器が存在しているのが現状です。
では、これらのことを解決するにはどうしたら良いのでしょう？被爆者の築城昭平さんはこうおっしゃいました。

「世界の人々全員に核を使った戦争の怖さを知ってほしい。
世界の人皆が知ることで、地球の本当の平和へと繋がる」

これを聞いて私は、事実を知ることがいかに重要であるかを痛感しました。そして、世界にはまだ原子爆弾の存在や、あの日起こった事実を知らない人が沢山いるはずです。
被爆者の肉声を聞き、唯一の被爆国である日本に生きる私たちには、そのような人々に事実を伝えていく使命があると思います。遠く離れた国の人々には難しくても、友人や、学校の皆には、私が自らの言葉で伝えることができます。
現在、被爆者の平均年齢は 82 歳をとうに超えていて、肉声を聞くことが徐々に困難となってきています。なので、これからの時代は、私たち若い世代が被爆者の思いを受け継ぎ、次世代へと語り継いでいく必要があると強く思いました。

今、私たちが暮らすこの日常は、多くの人々が努力されたことで存在しています。その努力を無駄にしないよう、これから私は自らの言葉で「事実」を伝えていきます。
もう二度と被爆者を作らないために。

最後になりますが、このような貴重な機会をくださった板橋区役所の皆さま、先生方をはじめとする、すべての関係者の皆さまに感謝を申し上げます。
本当にありがとうございました。

長崎を最後の被爆地に

中台中学校　２年　戸谷　ひより

「平和という問題には答えがない。しかし答えのない問題だからといって、この問題から逃げるのではなくしっかりと向き合う事が大切。」これは被爆体験講話で築城昭平さんがおっしゃっていた言葉です。この言葉から平和ということの大きさ、重みを感じ、とても印象に残りました。

『1日目』　青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話会と被爆建造物等のフィールドワークが行われました。被爆体験講話会では、知っていた話、聞いたことがあるようなことでも、実際に築城さんの口から発せられる言葉の１つ１つには重みがあり、「原爆」の恐ろしさ、「戦争」の悲惨さをより身近なこととして感じることができました。フィールドワークでは、原爆落下中心地や浦上天主堂などの場所に行きました。74 年前に落とされた原爆の傷跡が今でも残っていることへの驚きと同時に「原爆の威力の大きさ」を間近で感じました。

『2日目』　平和祈念式典

平和祈念式典では原爆に対する様々な思いをもった「声」が会場にいるたくさんの方々から伝わりました。その中でも特に強く心に響いた声は「長崎を最後の被爆地に」というものでした。私は「原爆に対する１人１人の思いは違うかもしれない。でも会場にいるいないに関わらず、この思いは全ての人の心の中になくてはならないものだ」と思いました。

『3日目』　長崎原爆資料館・追悼平和記念館

原爆資料館では、熱線、爆風、放射能による被害、核兵器に関わる情報、様々な資料の展示を観覧しました。その中でも私が特に印象に残った展示は「女子学生の弁当箱」という、熱線により被爆した堤郷子さんの弁当箱でした。弁当箱の中の米飯は炭化しており、副食を入れる裏側には「2 の 3 ツツミサトコ」の文字がありました。とてもリアルなもので、原爆投下直後の状況が想像させられるような展示物でした。また、追悼平和記念館では平和に関する様々な情報を閲覧し、追悼空間では永遠の平和を祈りました。

～ まとめ ～

今回の平和の旅では様々なことを実際に見て、聞いて、体験することができました。この３日間で体験したこと、感じたこと、考えたことをこれからたくさんの方々に伝えていきたいです。そして日本にいる人々だけでなく、世界全体が「核兵器のない平和な世界」を目指し、平和という問題から逃げることなく、向き合い続けることが私達人間の使命であるのだと強く感じました。

長崎を最後の被爆地に

上板橋第一中学校　２年　内山　柚穂

私は、長崎平和の旅に参加させていただき、戦争や原爆について多くのことを学んできました。青少年ピースフォーラムという現地の平和事業に参加したり平和祈念式典に出席して、平和の尊さや原爆の恐ろしさなど、さまざまなことを学びました。

1945 年 8 月 9 日、長崎に一発の原子爆弾が投下されました。その一発で多くの命が犠牲になりました。全身が焼け爛れた人や内臓が飛び出した人など、酷い姿になっていたと被爆体験者は語っていました。

被爆した建物を見に行く機会もいただきました。爆風の影響でとても重い建物がずれてしまっていました。人力では決して持ち上げられない物が爆風ひとつで動いてしまうなんて、どれだけ威力が強いのかと思うと、とても恐ろしく感じました。

長崎には今なお原爆の爪痕が多く残っています。それを見るだけでも原爆の恐ろしさを知ることができます。この恐ろしさをもっと世界へ発信することが必要だと思います。世界にはまだ核兵器を保有する国があります。核は、人間をはじめ全ての生物にとって、とても脅威であり、核がどれほど危険であるのかを知ってもらいたいと、強く思います。

被爆者をはじめ、遺族の方々、長崎の多くの人々は、「核兵器廃絶」を強く望んでいます。私達も被爆者の話を聞き、原爆の恐ろしさを学んだからこそ「核兵器廃絶」について深く考えなければいけないと思いました。核廃絶に向けて一歩踏み出すことが大切だと思いました。

日本は世界で唯一核が投下された国で、核の恐ろしさを知っているはずです。しかし、核兵器禁止条約に、今だに署名をしていません。核の恐ろしさを知っているからこそ、一刻も早く署名をしなければいけないと思います。もし、核兵器がまた使われるようなことが起これば、被害はもっと大きくなると思います。これ以上被害を受ける国を増やしてはいけません。それを防ぐためにも署名をして、核廃絶に声を上げるべきだと思います。「長崎を最後の被爆地に。」この想いを受け継いでいかなければいけないと強く心に誓いました。

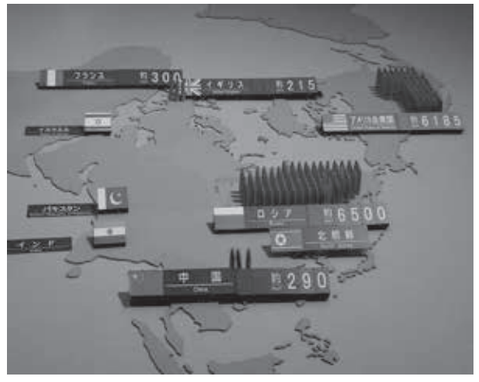
伝え続けて　求め続けて

上板橋第二中学校　２年　湯浅　結月

私は参加した平和祈念式典で、被爆者の方々が亡くなった人々の御霊をなぐさめ、平和を訴える歌を聴きました。戦争を実際に体験し、原爆の悲惨な事実を知っているからこそ、その歌は私の心に強く響きました。原爆は多くの人の未来を奪いました。そして戦争の脅威をみせつけました。被爆者の方々は歌や詩、絵などで原爆を知らない私たちに向けて、平和の大切さや、人の命の重さを教えてくれています。私たちにできることは、その一つ一つを受け止め、考えていくことだと思います。

ピースフォーラムでは、全国から集まった高校生が、原爆について私たちに教えてくれました。いろいろな場所をめぐり、原爆が投下される前と後の写真を見ながら説明を聴いたり、原爆が投下された当時の地層を見たりしました。当時の地層は埋め立てられており、工事の為に掘り返した時に見つかったそうです。割れたお皿や茶碗がたくさん埋まっていました。爆風により散乱して割れてしまったのです。それらは、爆風による被害の恐ろしさを物語っていました。

ピースフォーラム・平和祈念式典で被爆者の声を聴いた後、長崎原爆資料館へも行きました。資料館には原爆投下後に回収された多くの人の遺品がありました。他にも当時あった建築物の外壁も展示され、触れることができるようになっていました。外壁は原爆投下の時の熱風の影響で、溶けてごつごつで黒ずんでいました。この熱風により多くの人の命が奪われたのです。被爆者の声を思い出しながら展示されている写真を見ると、当時の様子が頭に浮かんだ気がしました。しかし、実際はもっとひどかったはずです。私はその時、「平和を願う」という事の意味が改めてわかったような気がしました。



各国の核保有数を表したものもありました。自分が想像していたよりも、はるかに多く広範囲でした。保有していないと思っていた国もありました。平和を訴える人がいる中で核は造られ、平和を願う人がいる中で核実験は行われているのです。

平和とは何か。今、日本は平和かもしれません。しかし、世界には戦争や紛争が絶えない地域がたくさんあります。核がある限り被爆国が絶対に出ないとは言えません。多くの人が戦争、原爆の恐怖を知り、考え、理解することが必要だと、今回の長崎平和の旅で強く感じました。

世界恒久平和に向けて

上板橋第三中学校　２年　鈴木　紗永子

今から 74 年前の 1945 年 8 月 9 日 11 時 02 分。長崎に落とされた原爆は一瞬にして多くの兵士や市民の命を奪いました。原爆は恐ろしい兵器であるにもかかわらず、核廃絶という考えがあるどころか、『長崎と広島に原爆が投下された』という事実まで風化されつつあります。実際私も、原爆が投下されたという事実は知っていても、何人の人が亡くなったのかなど、詳しいことまでは知りませんでした。だから、私は戦争や平和について深く知りたいと考え、この平和の旅に参加しました。

【被爆体験講話】

私たちは、被爆当時 18 歳で軍需工場勤めの築城昭平さんにお話を伺いました。爆心地から 1.8 ㎞の学校の寮で、夜勤に備えて睡眠している時に被爆し、頭の上から足の先まで火傷を負ったそうです。この講話で築城さんが続けて訴えたことは、「世界中の人類全員に“核所持は断固拒否”という考えを持ってほしい」ということです。現在、核保有国は９カ国あることがわかっています。ただ、核を取り締まる条約は少なく、核実験をする国も年々増加する一方です。このように世界各国で核が使われる危険性があると知って私は、築城さんと同じように人類全員に核反対の意を持ってほしいと思いました。そして、非核三原則の「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」というのをどの国にも広げるべきという強い思いを抱きました。

【平和祈念式典】

式典には私たち日本人だけでなく、世界各国の人が参列していました。平和を願う気持ちはどの国も変わらないということがわかりました。また、被爆者代表の山脇佳郎さんがおっしゃった「世界で唯一の被爆国として、あらゆる核保有国に『核兵器をなくそう』と働きかけてください」という言葉からは、核廃絶を願う人々の思いが伝わってきました。

【旅を終えて】

平和宣言において、市長の田上富久さんは「一人ひとりは微力であっても無力ではない」とおっしゃいました。一人ひとりが“核はいらない”という気持ちを持って生活していれば、いつか世界恒久平和につながると思います。また、これからの日本を担う私たちだからこそできることは、この貴重な体験を次世代に伝えるということです。私たちは原爆の恐ろしさを実際には知りません。しかし、この体験を次に伝えていくことはできます。そのために戦争や平和についてもっと深く考え、広めていきたいです。

長崎平和の旅に参加して

桜川中学校　２年　奥山　夏帆

私たちは、被爆地長崎で、2 泊 3 日にわたり、様々なことを見聞きしてきました。

【1 日目　被爆体験講話】

１日目は、長崎の原爆投下などに詳しい、「青少年ピースボランティア」の方々と、ピースフォーラムを行いました。開会宣言のあと、18 歳で被爆された、築城（ついき）　昭平（しょうへい）さんの講話を聴きました。その日は工場での夜勤に備えて昼に寝ていたそうです。毎日のように鳴る空襲警報を特に気にせず寝ていたら、突然「ガガガガ…」と音がして、吹き飛ばされ、壁にぶつかったそうです。慌てて外に出ると、昼間にも関わらず、周囲 1 メートル程しか見えなかったそうです。築城さんにとっては、思い出したくない事だったと思います。しかし、被爆した人でなくては分からないことも詳しく話してくださったので、本当にありがたかったです。

【2 日目　平和祈念式典】

平和祈念式典で一番私の印象に残ったことは、黙祷でのことです。11 時 2 分、司会の方が「黙祷」というのとほぼ同時に、遠くからサイレンの音が聞こえました。すると、町中が一瞬で静かになり、蝉の鳴き声以外は聞こえませんでした。式典の会場には、外国の方も多くいらっしゃったので、私は感動すると同時に、世界の平和を願う思いの深さを感じることができました。

【3 日目　平和公園での献花・長崎原爆資料館＆追悼平和祈念館見学】

資料館では、激戦の様子や原爆の脅威を示す物や写真が多く展示されていました。フィールドワークだけでは知ることができなかった、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」についてのデータも詳しく知ることができました。

【感想・私の考え】

長崎や広島で多くの犠牲者を出したにもかかわらず、未だ、世界では多くの核兵器が保持されています。また、それがいかに恐ろしいか身をもって伝えられる方々も、時がたつにつれてどんどん減ってきています。だからこそ、今回貴重な経験をさせていただいた私たちがそれを生かして、核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さを世の中に発信し、この世が平和になるようにしたいです。式典で「一人ひとりの力は微力でも、決して無力ではない。」という言葉があったように、私たちも、今回学んだことを皆さんに知ってもらうために、精一杯伝えるようにします。また、同行してくださった先生方、区役所の方々はもちろんのこと、共に学んだ仲間、築城さんをはじめとする長崎のことについてお世話になった皆さんにも感謝の気持ちをもって、一日一日を歩んでいきたいです。

私なりの「平和」in　長崎

赤塚第一中学校　２年　本郷　煌惺

「8 月 9 日、そこに平和なんてものは存在しない。目の前には絶望の炎が渦を巻いて、ひたすらに街を破壊していた。」被爆者の築城さんの話を聞いたとき、私はいままで曖昧な考えをもっていた「平和」に本当の意味を見つけられたような気がしました。

＜青少年ピースフォーラム＞

被爆体験講話会では、当時 18 歳で被爆された築城昭平さんが戦争当時の様子と原爆が投下されてすぐの長崎市の状況について語ってくれました。戦争当時の長崎には食べ物がほとんど無く、一回の食事はカボチャを少しかじるだけなど、とても質素だったそうです。また、戦争が悪化していくと学校に通うことができなくなり、遊びや勉強をすることも許されませんでした。働くことも男性は兵隊となって長崎を離れるか、工場で働くしか選択肢はなく、築城さんも貧しさや不自由に耐えながら工場で働いていたそうです。

今の日本には食べ物が沢山あります。学ぶことも働くことも自由に選択できます。今の日本に生まれてきた私には当時の状況の深刻さを完全に理解することはできません。それでも、築城さんが体験した質素な生活や戦争による不自由さを聞き、今に生きる私達がどれほど恵まれているか気付き、平和を大切にする気持ちを忘れてしまうとまた戦争が今の生活を奪ってしまうことを想像できました。

「原爆が投下されてすぐの長崎市は、まさに絶望そのものだった。」築城さんが実際に体験した被爆の話を聞いて、もし私が住んでいる所に原爆が落ちたらと考えると怖くて恐くて仕方がありませんでした。長崎市にいた人達はこれ以上の恐怖に実際に襲われていたのだと改めて気付き、平和になるためにはまず戦争と核兵器を無くさなければいけないと強く思いました。この世界にはまだ、1 万発以上もの核兵器が残っているといわれています。一つずつ減らしていけばその先に必ず、平和が見えてくるはずです。

＜最後に＞

平和の旅に参加する前は、私は「平和」とは単純に「戦争がないこと」と曖昧なイメージで捉えていました。しかし、今回の旅を通して「平和」の本当の意味について考えることができました。私の考える平和とは、「一人一人の人権を大切にできて、正しい主張がそのまま取り入れられる戦争がない世界」のことです。私は今回の体験で学んだ戦争と原爆の恐ろしさを学校の皆や家族、そして平和の集いにいらっしゃった方々に私の声で届け、私なりの「平和」を実現させるために戦争をやめるように呼びかけたいと思います。一人一人が戦争は本当に必要なものか考えればきっと戦争はなくなるはずです。皆で協力して「平和」な世界を目指しましょう。

次の世代へ繋ぐバトン

赤塚第二中学校　２年　小泉　摩耶

「もう私達のような被爆者を出さないで」

被爆者の方々が懸命に訴えていらっしゃったこの言葉は、三日間長崎で過ごした中で、とても印象に残りました。戦争の怖さ、命の尊さ、平和について深く考えさせられました。

<青少年ピースフォーラム>

若者達が戦争の悲惨さをフィールドワークを通して学ぶ場です。ここでは被曝者の築城さんからお話を聞きました。もう二度と戦争が起きないでほしい、世界に核兵器の怖さを知ってほしいと何度も訴えていました。私も、今回聞いたこと、感じたことを日本や世界の若者達に伝え、少しでも力になりたいと思いました。

<平和祈念式典>

私が式典の中で一番心に残ったのは「長崎平和宣言」です。原爆によって家族を失ってしまった女性が、原爆落下直後の長崎の様子をつづった詩を目をつぶって聞いてると、その当時を想像でき、なんと残酷な光景だったのだろうと思いました。

<長崎原爆資料館・追悼祈念館>

資料館では長崎に投下された「プルトニウム」の模型や、曲がってしまったハシゴなどの実物、火傷をした人の写真などもたくさんあり、大切な人を失う辛さや、人命を脅かされる恐怖が現実味をもって伝わってきました。

追悼祈念館では、今までに原爆関連で亡くなられた方の名簿があり、その前で私は、これから先、永遠の平和を創るために今自分ができることに全力で取り組むことを誓ってきました。

<最後に>

たくさんの方々から話を聞いたり、実物を見て、改めて戦争の脅威、平和の尊さ、これからの世界の平和、命、について考えさせられた三日間でした。まずは板橋区の人に核兵器の怖さを伝えていき、核も戦争もない平和な世界ができることを願っています。核兵器というものは、人の命を一瞬で奪えてしまう凶器です。その凶器が世界からなくなれば、永遠の平和への第一歩になるのではないかと思います。国民の力を合わせて、これからもめげずに訴え続けていきたいと思います。

当時の状況を知る方々が減っていく中で、戦争を知らない世代に、被爆者の方々の代わりとなってバトンを繋ぎ、平和の大切さを伝えていく役目を私達が担わなければならないと思いました。三日間で改めて、自分自身の使命を自覚することができてよかったです。

若者としての使命

赤塚第三中学校　２年　藤本　健太

僕は今回、長崎平和の旅に参加して色々なことを学びました。本やインターネット上では感じることのできない、様々な事を、3 日間を通して現地の長崎に訪れることで、その奥深いところまでを学ぶことができ、戦争について知るとてもいい機会となりました。そして、改めて自分の中で戦争の悲惨さや平和とは何かを考えることができました。

僕はこの 3 日間で、原爆資料館や原爆落下中心地など、様々な場所を訪れ、また被爆者講話なども通して戦争の悲惨さを改めて感じました。しかし、初めて参加した平和祈念式典には、それ以外の面で驚かされることが多く、真剣に平和について考えさせられました。

まず、参加して驚いたことは外国人の方が大勢この式典に参加していたことです。それもアメリカ人の方が特に多く、平和宣言や、被爆者のお話を翻訳しながら熱心に聞いており、とても驚きました。戦争の相手国であったアメリカからも、こうして日本に訪れ、原爆について、平和について考えているのだと感動しました。それとともに自分たち日本人が、日本は世界で唯一の被爆国であることを忘れずに、世界へと原爆の廃絶、平和を訴えていかなければいけないのだと改めて強く感じました。

もう 1 つ、僕には式典中に鮮明に覚えている事があります。それは、ある来賓の方の挨拶の一部です。「世界に変革をもたらす究極の力を若者はもっている。」この言葉はあの会場にいた自分たちに言っていたのではないかと思いました。世界の平和を実現するために動かなければいけないのは、他でもない自分たち「若者」。それなら、自分たちには何ができるのだろうかと考えさせられた一言でした。実際に戦争を経験した方々も減っていく中、長崎の高校生の方々は真剣に平和についての取組を行っていました。式典に参加して、初めて気がつきましたが、式典を裏でサポートしているのも高校生の方々、式典の司会進行も高校生 2 人がしています。それを見ていて、自分も 1 人の若者として、責任感を強く感じました。自分の中で平和祈念式典はとても貴重な体験となりました。

平和祈念式典をはじめ、その他被爆者講話やフィールドワークなどを通して戦争、原爆の悲惨さを改めて学ぶことができたとともに、本やインターネット上では感じられない現地に行ったからこそ感じられた、自分たち若者の使命を知ることができました。

今の日本社会は、平和への意識が薄れてきていると言われています。世界で唯一の原爆被爆国である日本には、世界の先頭を切って平和を実現していく使命があると思います。「長崎を最後の被爆地に。」僕は世界に、核のない平和な世界の実現を訴えかけることができるような人間になれるよう、1 人の若者として頑張りたいです。

最後に、今回このような貴重な体験をさせてくださった板橋区役所の方々や、先生方、その他関係者の方々ありがとうございました。この経験を今後に生かしていきたいです。

長崎平和の旅に参加して

高島第一中学校　２年　工藤　結菜

私は長崎平和の旅に参加し、様々なことを学びました。8 月 8 日、9 日、10 日の三日間にわたり多くの方々に教わったことは、私の心に深く刻み込まれました。平和の旅では、戦争の悲惨さや平和の尊さについて改めて実感することができました。

被爆体験講話では、築城さんに詳しく話を聞かせていただきました。被爆者の方のお話を聞くということは珍しく、普段は経験できない事なのでとても貴重な時間でした。今回話をしてくださった方は、たまたま布団をかぶっていたという偶然でケガはそこまで大きくなく、翌朝疎開をしていた家族に助けられたそうです。原爆が投下されたせいで、町は悲惨なことになっていました。家はすべて倒壊しており、あたりは静まり返っていたそうです。また、防空壕には人があふれかえっており、中には顔が前か後かわからないほどに、とても見るに堪えない怪我をしていた人もいました。自分も含め、すべての人々が痛みは感じなかった、と築城さんはおっしゃっていました。

平和祈念式典では、長崎市長の長崎平和宣言を聞きました。その中には、「罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた」という言葉がありました。多くの何の罪もない人々が戦争によって命を落とす、そんなことはもう二度とあってはいけない、戦争のせいで多くの人が苦しんだことを忘れてはいけない、とあらためて思いました。被爆者合唱では、「もう二度と」と「長崎の鐘」という曲がありました。もう二度との歌詞には「もう二度と作らないで　わたしたち被爆者を　この広い世界の　人々の中に」とあり、もう二度と原子爆弾で苦しんでしまう人が出ないようにという思いが強く込められています。

私たちは、たった一つの爆弾が、何人もの人々の未来を奪い絶望を与えたということをけっしてわすれてはいけません。そしてこれから先、多くの人に伝えていかなければなりません。私はこの平和の旅で学んだ多くの事を知ってもらうために少しずつでも、周りの人に伝えていきたいです。より多くの人が、もう二度と戦争を繰り返してはならないと思い、そして今平和に普通にくらせていることがどれほど幸せなのかを実感できるように頑張って伝えていきたいです。

原爆は長崎で最後にしなければならない

高島第二中学校　２年　佐藤　琴音

「原爆は長崎で最後にしなければならない。」被爆者の方々のお話の中で一番印象に残っている一言です。

被爆者の方々によると被爆直後の長崎では多くの負傷者でいっぱいになったそうです。近所の人も多く居たけれど「顔の皮がはがれてもう誰かわからなかった」ということです。

また、父親が亡くなってお兄さんと一緒に、父親を火葬したそうです。次の日、父の遺体を見に行くと半焼けの父の脳がぐちゃぐちゃになりでてきて、その方とお兄さんは思わず逃げだしたそうです。今では父の亡骸を捨てて逃げてしまったことを後悔しているそうです。

私だったら家族を自分たちの手で燃やすなんて不可能でしょう。そんな辛いことはできません。今でも被爆者の方々のお話が耳に残っています。

これまで長崎の原爆で 18 万 2,601 人の被爆者の方がこの世を去りました。

しかし、今でも世界には戦争をしている国もあり、核兵器も数多く残されています。

また、現在はロシア、アメリカ、フランス、中国、イギリス、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮などの 9 ヵ国が核兵器を保有しています。

核兵器の数は世界で 2 万 5 千以上と言われており、特にロシア、アメリカ、中国などの国では核兵器開発競争が激しくなりつつあります。

一方、世界では「核兵器をなくそう」という動きもあります。具体的には 2017 年に採択された核兵器禁止条約です。この条約は核兵器の使用や保有などを法的に禁止する国際条約で、核兵器は非人道的で違法なものであると明示し、加盟国に核兵器の開発、保有、実験、使用だけでなく、核兵器を使った威嚇行為も禁じている条約です。

また、世界のそれぞれの地域で非核地帯を設けている地域が、モンゴル、中央アジア、ラテンアメリカなどにいくつもあります。

私は、世界から核兵器をなくすためには、ひとりひとりが原爆の恐ろしさを知り、次の世代に伝えることが大切だと思います。

これからの私にできること

高島第三中学校　２年　深田　結希

私は今回の長崎での三日間で原爆や戦争、平和への考え方が大きく変わりました。今までは、本やインターネットなどで、ただ事実として見ているだけでした。しかし、被爆者の体験談を聴いたり、長崎の街や資料館に残されている戦争の多くの遺品を見たりしたとき、私の想像よりもはるかに超えていてとても衝撃を受けました。

「青少年ピースフォーラム」では、18 歳で被爆された築城昭平さんの体験講話が印象に残りました。軍需工場へ学徒動員され爆心地か 1.8 キロメートルのところで被爆し、全身火傷を負いました。国のためにやりたかった勉強を我慢し、働かされていました。何故築城さんは助かったのでしょうか。講話中、何度もおっしゃった「運が良かった」という言葉は心に響きました。その良運に導いたものは、投下当時、頭の上にあった布団でした。そのたった 1 枚の布のおかげで直接放射能を浴びずに済んだとおっしゃっていました。被爆し、たった 2 人が取り残され、悲しく、怖く、辛い思いをされたと考えると心が痛くなりました。しかし、築城さんは運よく、ある家族の助けによって薬をもらい、原因不明とされていた病気を徐々に治すことができました。私は、原爆で亡くなった方のために今も一生懸命生きている築城さんの心の強さを感じました。

平和祈念式典で被爆者代表として山脇佳朗さんがお話された「平和への誓い」。容易に想像も、信じることもできない事実を強く世界に発信されていました。爆死した父の遺骨を火箸で触れると頭蓋骨から白濁した半焼けの脳が流れ出てきたそうです。兄は悲鳴を上げ、逃げ出し、父を見捨ててしまったと恐怖と後悔が交錯する気持ちが伝わってきました。また、山脇さんは世界に向けて核兵器の廃絶を訴える活動をされていて、誓いの最後には英語でお話をされ、全世界に思いが届いて欲しいと思いました。

戦争がなければ、原爆がなければ、当時の方々には別の生き方があったと考えると悲痛な気持ちになりました。今私達は毎日を当たり前に楽しく過ごしています。しかしこの“平和の尊さ”を実感しなければいけないと思いました。今回の経験を活かし、一人でも多くの人にこの惨事を、そして平和の尊さを理解してもらえるよう、また被爆者や遺族の方々に寄り添えるよう努力していきたいです。

最後にこのような貴重な経験をさせてくださり本当にありがとうございました。

第３部　資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA　PEACE　MEMORIAL　CEREMONY

令和元年(2019年) 8 月 6 日

August 6, 2019

広　　島　　市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開　　式	8：00	**Opening**	
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8：00	**Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims** Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families	
式　　辞 広島市議会議長	8：03	**Address** Chairperson of the Hiroshima City Council	
献　　花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来　賓	8：08	**Dedication of Flowers** Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests	
黙とう・平和の鐘	8：15	**Silent Prayer and Peace Bell**	
平和宣言 広島市長	8：16	**Peace Declaration** Mayor of Hiroshima	
放　　鳩		**Release of Doves**	
平和への誓い こども代表	8：24	**Commitment to Peace** Children's representatives	
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8：29	**Addresses** Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations	
ひろしま平和の歌（合唱）	8：46	**Hiroshima Peace Song (chorus)**	
閉　　式	8：50	**Closing**	

平　和　宣　言

今世界では自国第一主義が台頭し、国家間の排他的、対立的な動きが緊張関係を高め、核兵器廃絶への動きも停滞しています。このような世界情勢を、皆さんはどう受け止めますか。二度の世界大戦を経験した私たちの先輩が、決して戦争を起こさない理想の世界を目指し、国際的な協調体制の構築を誓ったことを、私たちは今一度思い出し、人類の存続に向け、理想の世界を目指す必要があるのではないでしょうか。
特に、次代を担う戦争を知らない若い人にこのことを訴えたい。そして、そのためにも1945年８月６日を体験した被爆者の声を聴いてほしいのです。

当時５歳だった女性は、こんな歌を詠んでいます。
「おかっぱの頭（づ）から流るる血しぶきに　妹抱（いだ）きて母は阿修羅（あしゅら）に」
また、「男女の区別さえ出来ない人々が、衣類は焼けただれて裸同然。髪の毛も無く、目玉は飛び出て、唇も耳も引きちぎられたような人、顔面の皮膚も垂れ下がり、全身、血まみれの人、人。」という惨状を18歳で体験した男性は、「絶対にあのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい。」と訴えています。
生き延びたものの心身に深刻な傷を負い続ける被爆者のこうした訴えが皆さんに届いていますか。
「一人の人間の力は小さく弱くても、一人一人が平和を望むことで、戦争を起こそうとする力を食い止めることができると信じています。」という当時15歳だった女性の信条を単なる願いに終わらせてよいのでしょうか。

世界に目を向けると、一人の力は小さくても、多くの人の力が結集すれば願いが実現するという事例がたくさんあります。インドの独立は、その事例の一つであり、独立に貢献したガンジーは辛く厳しい体験を経て、こんな言葉を残しています。
「不寛容はそれ自体が暴力の一形態であり、真の民主的精神の成長を妨げるものです。」
現状に背を向けることなく、平和で持続可能な世界を実現していくためには、私たち一人一人が立場や主張の違いを互いに乗り越え、理想を目指し共に努力するという「寛容」の心を持たなければなりません。
そのためには、未来を担う若い人たちが、原爆や戦争を単なる過去の出来事と捉えず、また、被爆者や平和な世界を目指す人たちの声や努力を自らのものとして、たゆむことなく前進していくことが重要となります。

そして、世界中の為政者は、市民社会が目指す理想に向けて、共に前進しなければなりません。そのためにも被爆地を訪れ、被爆者の声を聴き、平和記念資料館、追悼平和祈念館で犠牲者や遺族一人一人の人生に向き合っていただきたい。
また、かつて核競争が激化し緊張状態が高まった際に、米ソの両核大国の間で「理性」の発露と対話によって、核軍縮に舵（かじ）を切った勇気ある先輩がいたということを思い起こしていただきたい。
今、広島市は、約7,800の平和首長会議の加盟都市と一緒に、広く市民社会に「ヒロシマの心」を共有してもらうことにより、核廃絶に向かう為政者の行動を後押しする環境づくりに力を入れています。世界中の為政者には、核不拡散条約第６条に定められている核軍縮の誠実交渉義務を果たすとともに、核兵器のない世界への一里塚となる核兵器禁止条約の発効を求める市民社会の思いに応えていただきたい。

こうした中、日本政府には唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への署名・批准を求める被爆者の思いをしっかりと受け止めていただきたい。その上で、日本国憲法の平和主義を体現するためにも、核兵器のない世界の実現に更に一歩踏み込んでリーダーシップを発揮していただきたい。また、平均年齢が82歳を超えた被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

本日、被爆74周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和元年（2019年）８月６日

広島市長　松　井　一　實

平和への誓い

私たちは、広島の町が大好きです。
ゆったりと流れる川、美しい自然、
「おかえり。」と声をかけてくれる地域の人、
どんなときでも前を向いて生きる人々。
広島には、私たちの大切なものがあふれています。

昭和20年（1945年）８月６日。
あの日から、血で染まった川、がれきの山、皮膚がはがれた人、たくさんの亡骸、
見たくなくても目に飛び込んでくる、地獄のような光景が広がったのです。
大好きな町の「悲惨な過去」です。
被爆者は語ります。「戦争は忘れることのできない特別なもの」だと。

私たちは、大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受け止め、
次の世代や世界中の人たちに伝え続けたい。
「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。
二度と戦争をおこさない未来にするために。

国や文化や歴史、
違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。
みんなの「大切」を守りたい。

「ありがとう。」や「ごめんね。」の言葉で認め合い許し合うこと、
寄り添い、助け合うこと、
相手を知り、違いを理解しようと努力すること。
自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。

大好きな広島に学ぶ私たちは、
互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。
意志をもって学び続けます。
被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、平和への思いを世界につなげます。

令和元年（2019年）８月６日

こども代表
広島市立落合小学校６年　金田（かねだ）　秋佳（しゅうか）
広島市立矢野小学校６年　石橋（いしばし）　忠大（ただひろ）

Commitment to Peace

August 6, 2019

We, the children of Hiroshima, love our city.
Her slow-running rivers and natural beauty,
The voices of the community, welcoming us back home from school,
Citizens that are ever resilient and hopeful.
Hiroshima is full of all these precious things and more.

August 6, 1945.
On that day, and in the days to come, hellish sights so horrific they could not be unseen unfolded:
The rivers run red with blood, the mountains of debris, the people stripped of their skin, piles of corpses.
This is the harrowing past of our beloved city.
“War is a very peculiar thing; it is impossible to forget.” These are the words of the *hibakusha*.

We carry the strong voices of the souls of the *hibakusha* who were all robbed of something irreplaceable,
And we will relay these voices to the next generation and to the world at large.
To ensure our harrowed past will not end as just our harrowed past.
To ensure a future which will never again start wars.

Our countries, our cultures, our histories;
Though our differences are many, one thing remains the same: the way we feel about things which are precious, people who are precious to us.
We want to protect these things, these people who are precious.

Recognizing and forgiving one another with phrases like “thank you” and “I’m sorry,”
Supporting and helping one another,
Learning about one another and making the effort to understand our differences:
These are things that even we children can do, things which will bring peace to our communities.

As children learning in our beloved Hiroshima,
We shall be considerate of one another and openly share our feelings.
We shall continue to learn of our own volition.
With our hearts and the hearts of the *hibakusha* as one, we shall bring the ideals of peace to the world.

Children’s Representatives:
Shuka Kaneda (6th grade, Hiroshima City Ochiai Elementary School)
Tadahiro Ishibashi (6th grade, Hiroshima City Yano Elementary School)

令和元年８月９日
August 9, 2019

被爆 74 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 74th Nagasaki Peace Ceremony

式　次　第		Program
被爆者合唱	１０：４０	Chorus by A-bomb Survivors
開　　式	１０：４５	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４６	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４８	Opening Address
献　　水	１０：５２	Water offering
献　　花	１０：５４	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１２	Pledge for Peace
児 童 合 唱	１１：１９	Children's chorus
来 賓 挨 拶	１１：２４	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：４０	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉　　式	１１：４５	Closing words

目　　次

会場案内図・被爆者合唱…… 1ページ
司 会 者 名…… 2
献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3～4
長崎平和宣言…… 5～8
平和への誓い…… 9～10ページ
児 童 合 唱…… 11
千 羽 鶴（ 歌 ）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13～14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15～18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

長 崎 平 和 宣 言

目を閉じて聴いてください。

幾千の人の手足がふきとび
腸わたが流れ出て
人の体にうじ虫がわいた
息ある者は肉親をさがしもとめて
死がいを見つけ　そして焼いた
人間を焼く煙が立ちのぼり
罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた

ケロイドだけを残してやっと戦争が終わった

だけど……
父も母も　もういない
兄も妹ももどってはこない

人は忘れやすく弱いものだから
あやまちをくり返す
だけど……
このことだけは忘れてはならない
このことだけはくり返してはならない
どんなことがあっても……

これは、1945年８月９日午前11時２分、17歳の時に原子爆弾により家族を失い、自らも大けがを負った女性がつづった詩です。自分だけではなく、世界の誰にも、二度とこの経験をさせてはならない、という強い思いが、そこにはあります。

原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。

今、核兵器を巡る世界情勢はとても危険な状況です。核兵器は役に立つと平然と公言する風潮が再びはびこり始め、アメリカは小型でより使いやすい核兵器の開発を打ち出しました。ロシアは、新型核兵器の開発と配備を表明しました。そのうえ、冷戦時代の軍拡競争を終わらせた中距離核戦力（ＩＮＦ）全廃条約は否定され、戦略核兵器を削減する条約（新ＳＴＡＲＴ）の継続も危機に瀕しています。世界から核兵器をなくそうと積み重ねてきた人類の努力の成果が次々と壊され、核兵器が使われる危険性が高まっています。

核兵器がもたらす生き地獄を「くり返してはならない」という被爆者の必死の思いが世界に届くことはないのでしょうか。

そうではありません。国連にも、多くの国の政府や自治体にも、何よりも被爆者をはじめとする市民社会にも、同じ思いを持ち、声を上げている人たちは大勢います。

そして、小さな声の集まりである市民社会の力は、これまでにも、世界を動かしてきました。1954年のビキニ環礁での水爆実験を機に世界中に広がった反核運動は、やがて核実験の禁止条約を生み出しました。一昨年の核兵器禁止条約の成立にも市民社会の力が大きな役割を果たしました。私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。

世界の市民社会の皆さんに呼びかけます。

戦争体験や被爆体験を語り継ぎましょう。戦争が何をもたらしたのかを知ることは、平和をつくる大切な第一歩です。

国を超えて人と人との間に信頼関係をつくり続けましょう。小さな信頼を積み重ねることは、国同士の不信感による戦争を防ぐ力にもなります。

人の痛みがわかることの大切さを子どもたちに伝え続けましょう。それは子どもたちの心に平和の種を植えることになります。

平和のためにできることはたくさんあります。あきらめずに、そして無関心にならずに、地道に「平和の文化」を育て続けましょう。そして、核兵器はいらない、と声を上げましょう。それは、小さな私たち一人ひとりにできる大きな役割だと思います。

すべての国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れ、原子雲の下で何が起こったのかを見て、聴いて、感じてください。そして、核兵器がいかに非人道的な兵器なのか、心に焼き付けてください。

核保有国のリーダーの皆さん。核不拡散条約（ＮＰＴ）は、来年、成立からちょうど50年を迎えます。核兵器をなくすことを約束し、その義務を負ったこの条約の意味を、すべての核保有国はもう一度思い出すべきです。特にアメリカとロシアには、核超大国の責任として、核兵器を大幅に削減する具体的道筋を、世界に示すことを求めます。

日本政府に訴えます。日本は今、核兵器禁止条約に背を向けています。唯一の戦争被爆国の責任として、一刻も早く核兵器禁止条約に署名、批准してください。そのためにも朝鮮半島非核化の動きを捉え、「核の傘」ではなく、「非核の傘」となる北東アジア非核兵器地帯の検討を始めてください。そして何よりも「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念の堅持と、それを世界に広げるリーダーシップを発揮することを求めます。

被爆者の平均年齢は既に82歳を超えています。日本政府には、高齢化する被爆者のさらなる援護の充実と、今も被爆者と認定されていない被爆体験者の救済を求めます。

長崎は、核の被害を体験したまちとして、原発事故から８年が経過した今も放射能汚染の影響で苦しんでいる福島の皆さんを変わらず応援していきます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、長崎は広島とともに、そして平和を築く力になりたいと思うすべての人たちと力を合わせて、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2019年（令和元年）８月９日

長崎市長　**田　上　富　久**

平 和 へ の 誓 い

1945年８月、アメリカが広島・長崎に原爆を投下し20数万人の命が奪われました。私は当時11歳、爆心地から約２㎞の自宅で被爆しました。

母と４人の弟・妹は佐賀へ疎開していて難を免れましたが、父は爆心地から500mの工場で爆死していました。私たちは兄弟３人で焼け残りの木片を集めて焼け落ちた工場の傍で父の遺体を荼毘に付しました。しかし焼けていく遺体を見るに耐えきれず燃え上がる炎を見ながらその場を離れました。

翌日、遺骨を拾いに行きました。でも遺体は半焼けで完全に焼けていたのは手足の一部だけでした。「せめて頭の骨だけでも拾って帰ろう」と兄が言い、火箸で頭の部分に触れたら頭骸骨は石膏細工を崩すように割れ白濁した半焼けの脳が流れ出したのです。兄は悲鳴を上げ火箸を捨てて逃げ出しました。

私もその後を追って逃げ出したのです。私たちはこんな状態で父の遺体を見捨ててしまいました。原爆で火葬場も破壊されたため、家族や身内を亡くした人々は私たちと同じように無残な体験をしなければならなかったのです。

それだけではありません。辛うじて生き残った人々は熱線による傷や放射能による後遺症に悩まされながら生きていかねばなりませんでした。

私は原爆の被害を受けて20数年後、急性肝炎、腎炎を発症し今なお治療を続けています。更に60数年後には胃ガンに侵され2008年2010年にガンを摘出する手術を受けました。あの時、私と一緒に行動した兄と弟もガンに侵され治療を続けています。

あれから74年、被爆者の私達は多くの方々と「核兵器廃絶」を訴え続けてきました。また、60歳を過ぎて英語を独学で学び、2015年11月長崎で開催されたパグウォッシュ会議では世界の科学者に英語で「核兵器廃絶」に力を貸して下さいと訴えました。しかし、ロシア、アメリカなどの国々に今なお13,880発もの核兵器が保有されていると言われています。

更にアメリカはロシアとの間に締結している中距離核戦力全廃条約からの離脱を宣言しました。２月にはトランプ政権になってから２回目の「臨界前核実験」を行ったと報じられています。これは「核兵器の廃絶」を願う人々の期待を裏切る行為です。

被爆者は日を追うごとに亡くなっています。私はこの場で安倍総理にお願いしたい。

被爆者が生きている内に世界で唯一の被爆国として、あらゆる核保有国に「核兵器を無くそう」と働き掛けてください。この問題だけはアメリカに追従する事なく核兵器に関する全ての分野で「核兵器廃絶」の毅然とした態度を示して下さい。勿論、私も死ぬまで「核兵器廃絶」を訴え続けます。

それが74年前、広島・長崎の原爆で失われた20数万人の命、後遺症に苦しみながら生き残っている被爆者に報いる道だと思います。

私は第２次世界大戦によって310万人の命を犠牲にした日本が、戦後に確立した「平和憲法」を守り続け、戦争や核兵器もない世界を実現する指導的な役割を果せる国になって欲しいと念願し「平和への誓い」と致します。

Please lend us your strength to eliminate nuclear weapons from the face of the earth and make sure that Nagasaki is the last place on Earth to suffer an atomic bombing.　　Thank you.

2019年８月９日

被爆者代表　**山　脇　佳　朗**